

新潟市正尺 C 遺跡出土の縄文施文土器

－天王山系土器の下限を探る－

加 藤 学

はじめに

正尺 C 遺跡は、新潟市北区（旧豊栄市）に所在する阿賀北地域（阿賀野川以北の新潟県北部地域）を代表する古墳時代前期の集落である。平成 11・12（1999・2000）年度に発掘調査が行われ、このうち平成 12 年度は筆者が調査担当者となった。調査では、外周約 22m の周溝を有する建物を検出したことで注目され、これとともに古墳時代前期の土器に混在して出土した縄文施文土器にも注意が払われた。筆者は、調査直後に行われた新潟県考古学会第 13 回大会において、縄文施文土器を次のように報告した。

「編年的には漆町編年〔田嶋 1986〕の 5～7 群に属するものが認められるが、そのほとんどは 6・7 群に位置付けられる。土器の系統は、北陸系を主体とするが、東海系の壺・高杯、東北系の縄文が施された甕も認められた。東北系と考えられる土器については、弥生時代後期の天王山系土器との共通性が認められるが、出土状況から編年差を判断することはできない。むしろ、出土土器群の編年的なまとまりを鑑みれば、あえて分離すべき根拠は乏しいと考えられる。」〔加藤 2001〕

この報告段階では、出土状況の観察から古墳時代前期前半の土器に縄文施文土器が伴う可能性が高いと考えた。このように報告した念頭には、福島県会津坂下町稻荷塚遺跡における共伴事例があった。そして、稻荷塚遺跡の報告書における〔中村 1995b〕の記述も踏まえ、古墳時代前期のものと指摘した。ただし、類例が少なく、このように報告することに不安要素もあった。実際、正尺 C 遺跡における古墳時代前期の土器に縄文施文土器が伴うとは考えられないとの助言を幾人かの研究者からいただいた。そして、広義の天王山系土器〔石川 2000〕が混在したのであろうと指摘を受けた。このような所見も踏まえ、調査の 6 年後に刊行された報告書では、縄文施文土器の編年的位置付けについて、次の 3 点の理解が可能とした〔土橋 2006〕。

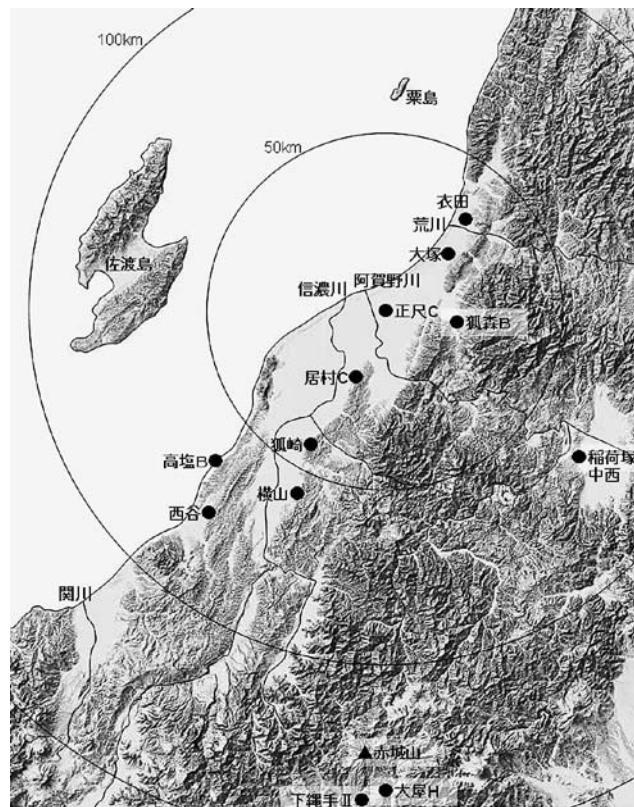
- ① 形態的に見ると 2～5 期に位置付けられる。この場合、その他の土器とは共伴しない。
- ② 出土状況から縄文施文土器とその他の土器を分離することは難しい。会津に 6～7 期の共伴事例があるので、正尺 C 遺跡においても共伴の可能性がある。その場合、502・504（第 11 図）などは天王山系土器の器形や装飾が退化した最終形態ともいべきものといえる。
- ③ 共伴とした場合、形態的に 2～5 期までの幅がある全ての縄文施文土器が伴うのか、その一部が伴うのかは問題点として残る。

極めて慎重な表現に留意していることが分かる。現段階でこれ以上のことと言うことが困難なことは事実である。一方、出土状況を最も間近で見てきた発掘調査担当者としての見解を明らかにしておく必要性も感じた。報告書から、一歩踏み出せるか否かということを念頭に置き、縄文施文土器の位置付けを行いたい。

1. 正尺 C 遺跡の概要

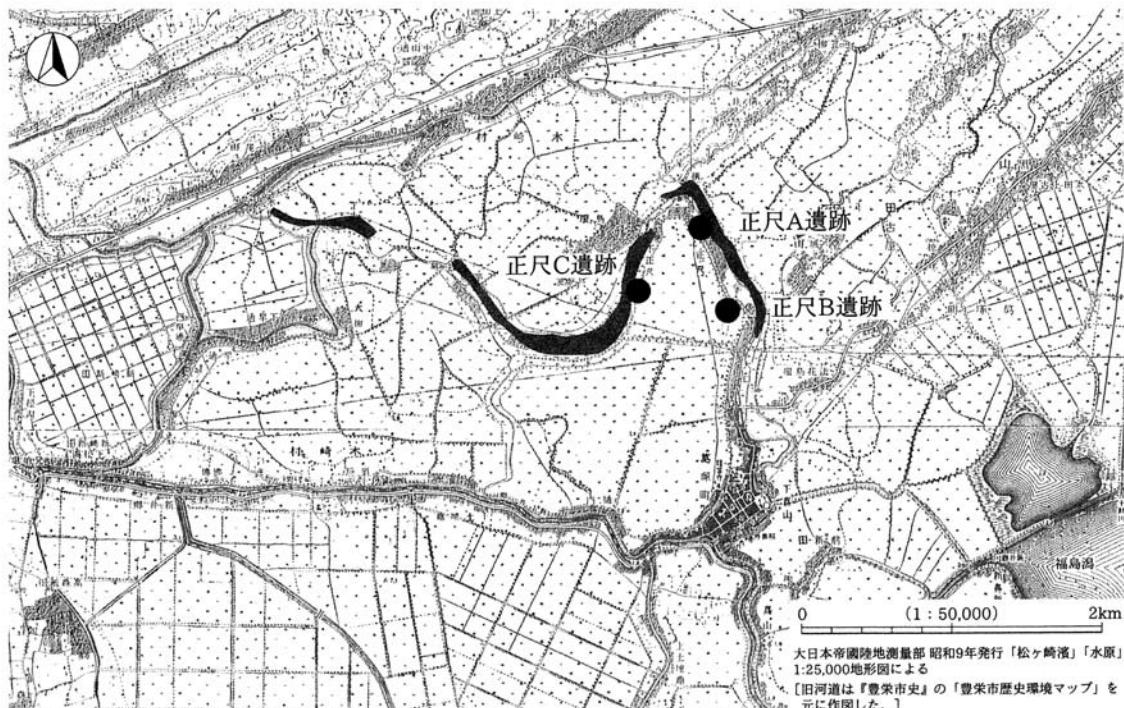
正尺 C 遺跡は、新潟市北区葛塚字正尺に所在する（第1・2図）。旧新井郷川によって形成された自然堤防上に立地し（第2図）、遺構検出面の標高は約 -0.5 m である。阿賀北地域を代表する古墳時代前期の集落で、周溝を有する平地建物 1 棟、竪穴建物 3 棟、掘立柱建物 8 棟、方形周溝状遺構 1 基等から構成される。現在でこそ類例が増加したものの、調査当時、阿賀北地域で古墳時代前期の遺跡はほとんど発見されておらず、特に外周が 22m を超える周溝を有する建物（第3図）が注目を集めた。

阿賀北の地域的特徴としては、東北系の遺物が断続的に認められる点を挙げることができる。日本海沿いに形成された古砂丘上には多くの遺跡が密集し、弥生時代においては天王山系土器、古墳時代には続縄文土器、古代においては東北北部型土師器が出土する等、北方の要素を多く見出すことができる。本稿で取り上げる縄文施文土器は、同様の系譜に位置付けられる東北系の

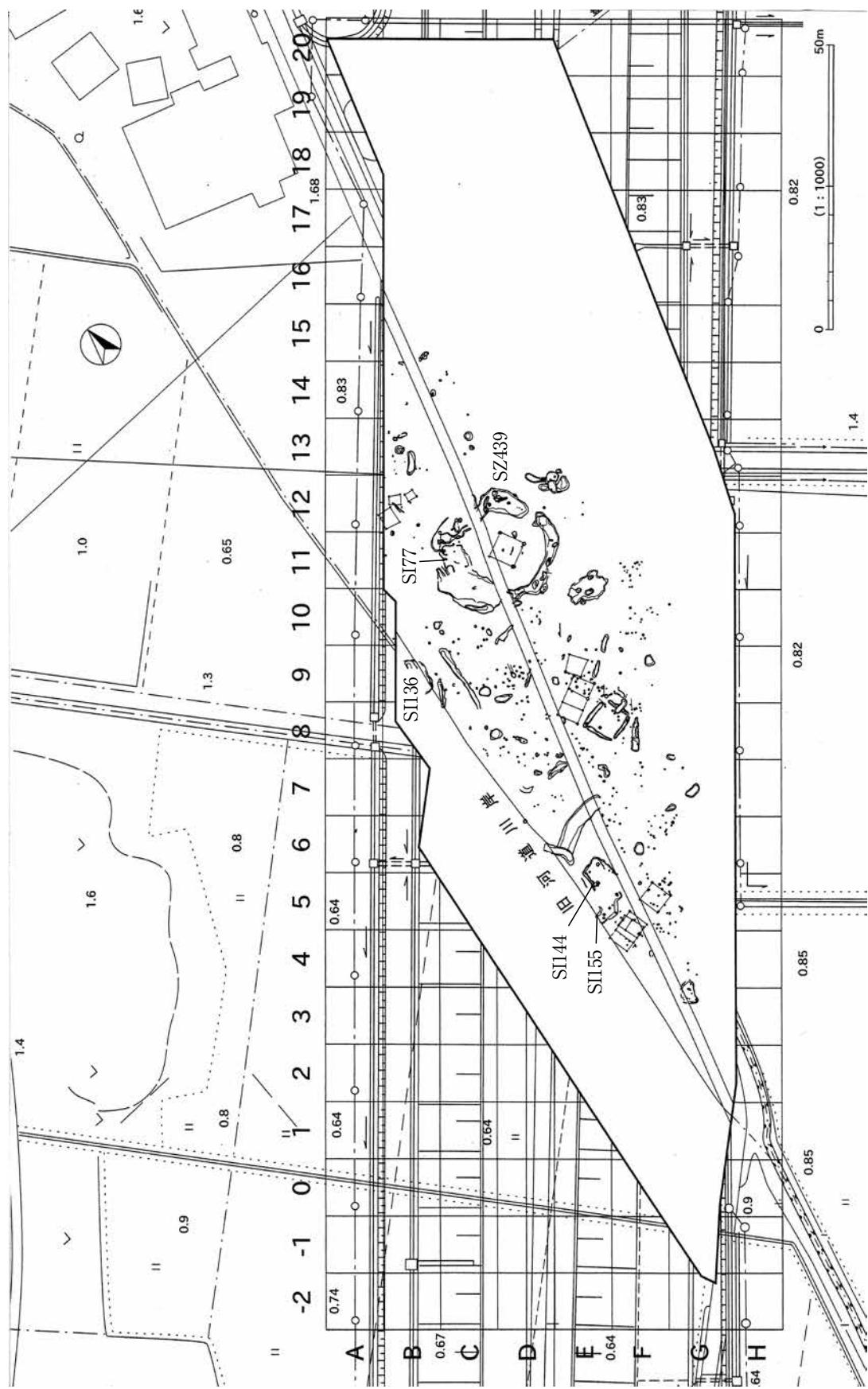


第1図 正尺 C 遺跡と関連遺跡の位置

（国土地理院 2002『数値地図 200000 地図画像 日本 II を合成の上、作製』）



第2図 正尺 C 遺跡と旧河道の位置



第3図 正尺C遺跡 遺構全体図

遺物と考えられる。

正尺C遺跡から出土した多数の土器は、新潟シンポジウム編年6期を主体に一部7期まで下る。したがって、極めて短期間に築かれ、消滅した集落と言える。一方、多くの時期の遺跡が重複しないことは、資料的価値の高さの裏返しでもあり、この点においても遺跡の重要性を指摘できる。すでに報告書が刊行されているので、詳細は〔土橋 2006〕を参照されたい。なお、本稿で示す遺物番号は、すべて報告番号と一致する。

2. 正尺C遺跡出土土器の編年観と特徴

(1) 土器の編年的位置付け

弥生時代後期～古墳時代前期の土器は、2度にわたって新潟県で行われたシンポジウム（日本考古学協会新潟大会実行委員会『東日本における古墳出現過程の再検討』〔川村 1993〕、新潟県考古学会『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』〔滝沢 2005a〕）で提示された編年（以下、「新潟シンポ編年」とする。）を基軸に考えたい。時期及び器種の分類名は、定点観測の蓄積が必要と考えることから〔滝沢 2005a〕を採用した。各地域における編年との対応関係は、第1表のとおりである。

報告書においては、周溝を有する平地建物 SZ439、堅穴建物 SI155・SI33・SI144・SI77（第3図）を遺構の変遷を辿る上での指標とした。各遺構から出土した主要な遺物は、第4～8図のとおりである。報告書の記述を基本に、筆者の所見を補足し再編した。

SZ439（第4図） SZ439は主にSD209・311・214から構成される。甕は「く」の字口縁で面取りが顕

時代	実年代	滝沢	川村	漆町編年	北陸(南西部)	東北系日本海側	東北系福島	東海編年	畿内				
	滝沢 2010c	2005a	2000	田嶋 1986・2007	型式・様式	石川 2004	石川 2004	赤塚 1990	編年				
弥生時代	AD0 (¹⁴ C)	1期	漆町 1群	専光寺～戸水B	山草荷式	川原町口式	山中式後期	IV様式	V様式				
				V-1									
				V-2		砂山1式	天王山1a期(和泉)						
	AD100 (¹⁴ C)			V-3									
	2期	漆町 2群	猫橋	砂山2式	天王山1b期(能登)								
										AD169(年輪)			
	3期	漆町 3群	法仏	天王山2期(天王山)	滝ノ前2・3群	屋敷段階	VII様式	VI様式					
	4期	漆町 4群	月影	滝ノ前2・3群	屋敷段階	廻間I式	庄内I	庄内I					
古墳時代	AD258(年輪)	5期	1段階						漆町 5群				
		6期	2段階	漆町 6群	白江		廻間II式	庄内II	庄内III				
		7期	3段階	漆町 7群									
		8期	4段階	漆町 8群	古府クルビ			庄内IV	布留I				
		9期	5段階	漆町 9群	高畠								
		10期	6段階	漆町 10群		布留II	松戸式前期						

第1表 弥生時代～古墳時代における地域間の編年の対応関係と実年代

（〔春日ほか 2008、滝沢 2005a・2009・2010c〕をもとに作成）

※AD169(年輪)は大友西 SE18、AD258(年輪)は二口かみあれた SX208 の資料による。¹⁴C 年代は、おおむねの目安である。
※弥生時代・古墳時代の境界は、定点を何に置くかによって見解は様々であることから、漸移的なラインを設けた。

著な 91、口縁端部を丸く收める 92 のほか、有段口縁の 194 がある。壺は畿内系 153・154・215、東海系 152、小型壺は北陸的な 111、東海系ひさご壺と在地土器の折衷形態 109・217 がある。器台の形態構成が多様であることが特徴的で、小型器台のほか、装飾器台 128・165・237、結合器台、鍔付結合器台 129・130・234 がある。このような内容を各期の基準資料と比較する。二重口縁の畿内系壺 153・154 は 7 期の基準資料とされる新潟市緒立遺跡 2 号住居 [金子 1983] のものと比較して口縁部の稜線が明瞭なので、より古相を呈する可能性がある。同じく 5 期の緒立遺跡 3 号住居 [金子 1983] に見られるような有段口縁擬凹線の甕を組成しないので、これより新相を呈すると考えられる。よって、SZ439 は 6 期に位置付けるのが妥当であろう。

SI155 (第 5 図) 甕は比較的しっかりした有段口縁の 4、「く」字口縁の 1~3 がある。ほかに大型の有段口縁大型壺 25、有段口縁の鉢 15 がある。いずれの器種も有段部が明瞭で、6 期の中に位置付けておきたい。

SI36 (第 6 図) 甕は口縁に面取りがある「く」字口縁を主体に、近江系の可能性がある 53・64、口縁が強く外側に引き出される 62 等、多様である。壺は畿内系の二重口縁壺 65 がある。SI36 最大の特徴は小型器台・装飾器台・結合器台等、多様な器台を組成することである。装飾器台 83 は受部端部が突出する。類似資料は 5 期に位置付けられている三条市狐塚遺跡 [金子 1981] にある。鍔付結合器台 85 は受部に稜をもつ、稀な形態である。[土橋 2006] では、SI36 を 6 期の中でも古い段階に位置付けられているが、微妙な判断も伴っており、本稿では 6 期の範囲に含まれるものとしておきたい。

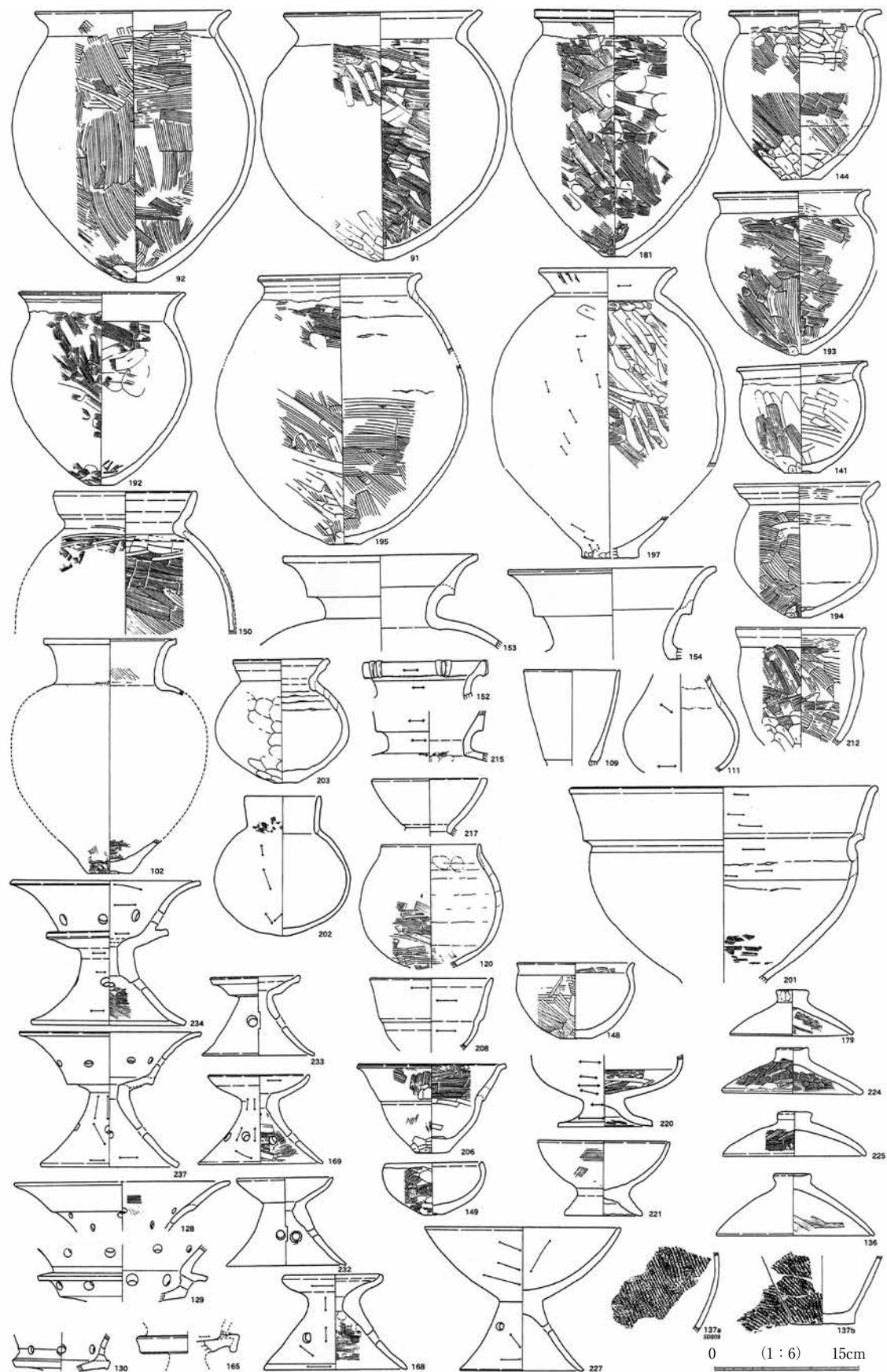
SI144 (第 7 図) 「く」字口縁の甕は面取りされるものが多い。有段口縁壺 32・33 の有段部は明瞭に作り出されている。脚部の裾が大きく開く高杯 48 は、6~7 期に位置付けられている正尺 A 遺跡 SI1 [尾崎 2001] に類例がみられる。

SI77 (第 8 図) 甕は有段口縁甕 249、体部最大径が下方にある 250 がある。口縁の面取りはしっかりしたものが多い。壺は畿内系の二重口縁壺 259、小型壺は無頸壺 258 や東海系ひさご壺と在地土器の折衷形態 256・257・261・262 がある。蓋 255 の摘みは大きく、新しい要素をもつ。高杯は東海系 272 がある。276 は外面がケズリで仕上げられた高杯脚部である。報告書では東北地方で 9~10 期に認められるものに共通性を見出したが、正尺 C 遺跡における土器群の時期的なまとまりとの相違が著しい。中実に近い低い脚部は、越後でも 5 期以降に存在する [滝沢 2005a] ことから、東北地方との関係については慎重に評価しておきたい。器台は小型器台のほか装飾器台 275 がある。SI77 は総体的に新しい要素をもつ土器が多く、本稿では 6~7 期の時期幅をもって位置付けておきたい。

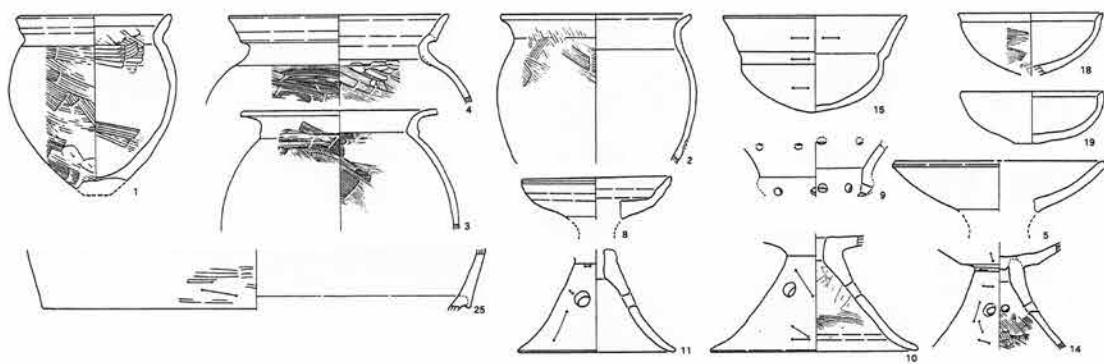
(2) 外来系の土器

地域間の編年関係を対比する上で重要な指標となるのが外来系土器 (第 9 図) の存在である。東海系二重口縁壺、東海系ひさご壺、畿内系二重口縁壺、近江系壺、北陸系小型器台、北陸系装飾器台、そして東北系の縄文施文土器である。[滝沢 2005a] を基本に記述し、これを補足する記述があるものは [土橋 2006] をもとに形態的特徴を記述したい。

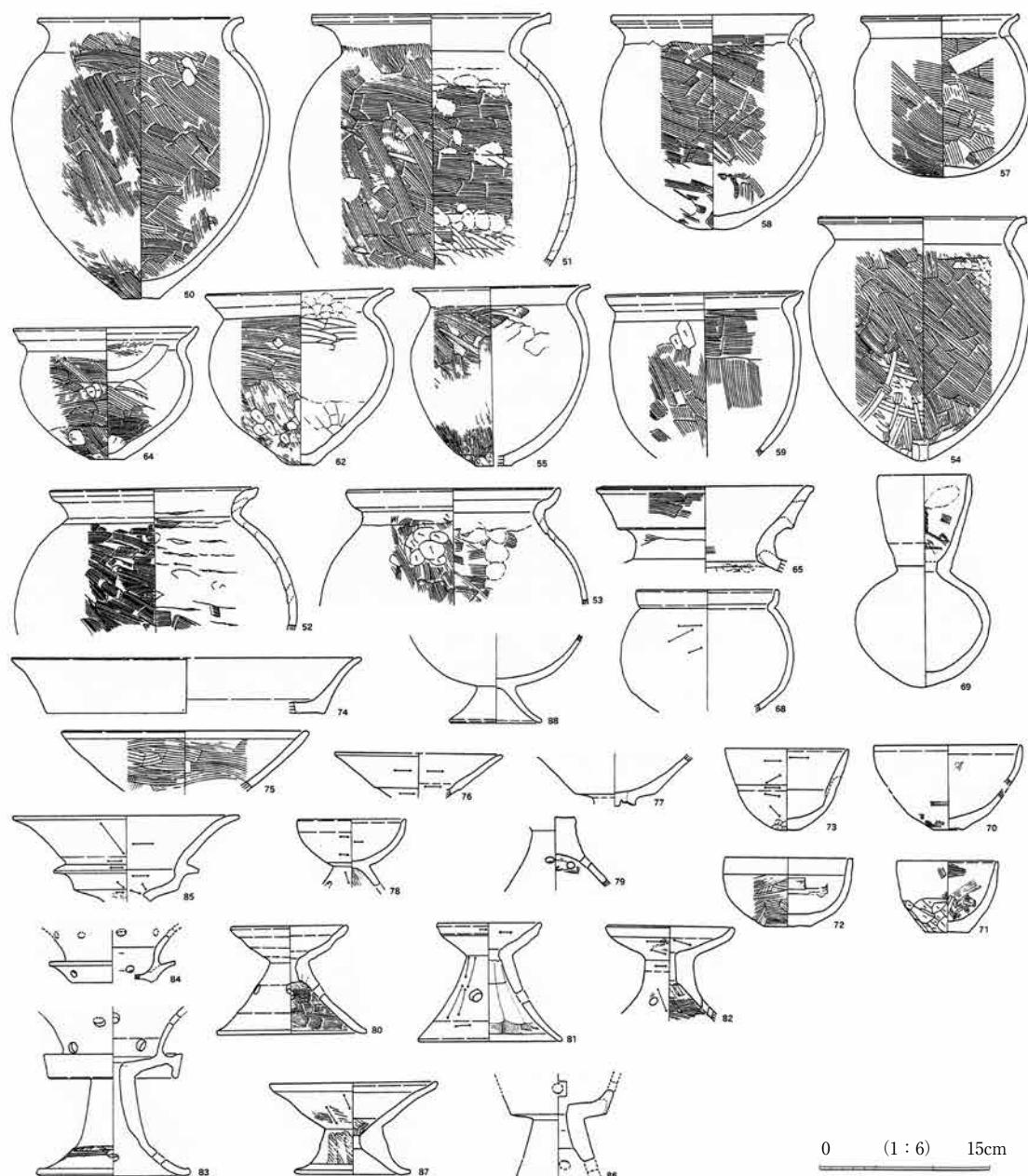
東海系二重口縁壺 ([滝沢 2005a] O I 類) 5 期頃から認められ、7~8 期には主体となる。頸部が外反して、短い口縁部に至るものを I 類とする。出土例は多く、文様の有無で細分可能とされる。口縁部には、棒状浮文 2~4 本 (436~438) やボタン状浮文 (413) が貼り付けられる事例がある。肩部 439 には、櫛歯状工具によって平行沈線文で区画し、その間を同じ工具の先端部で押圧して山形文が施される。東海系パレス壺を模倣したものであろう。



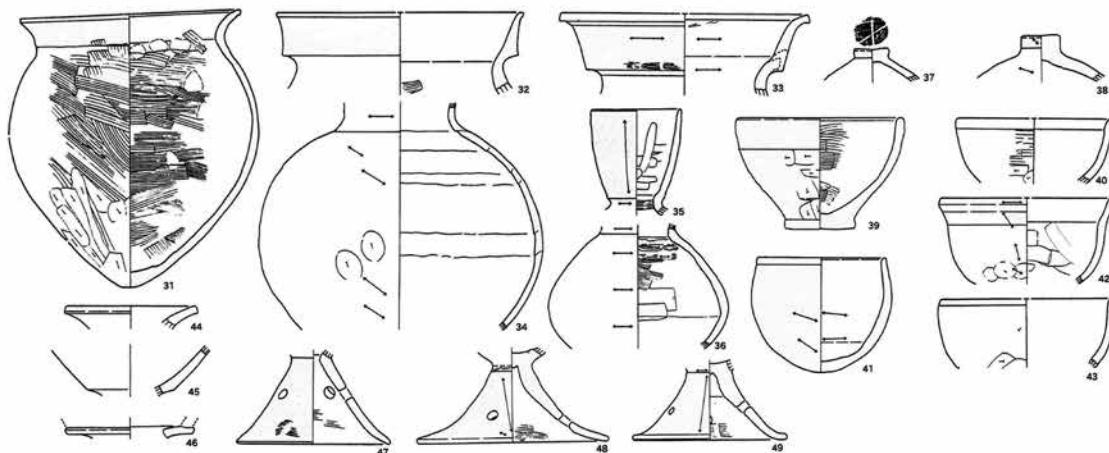
第4図 正尺C遺跡SZ439出土土器(6期)



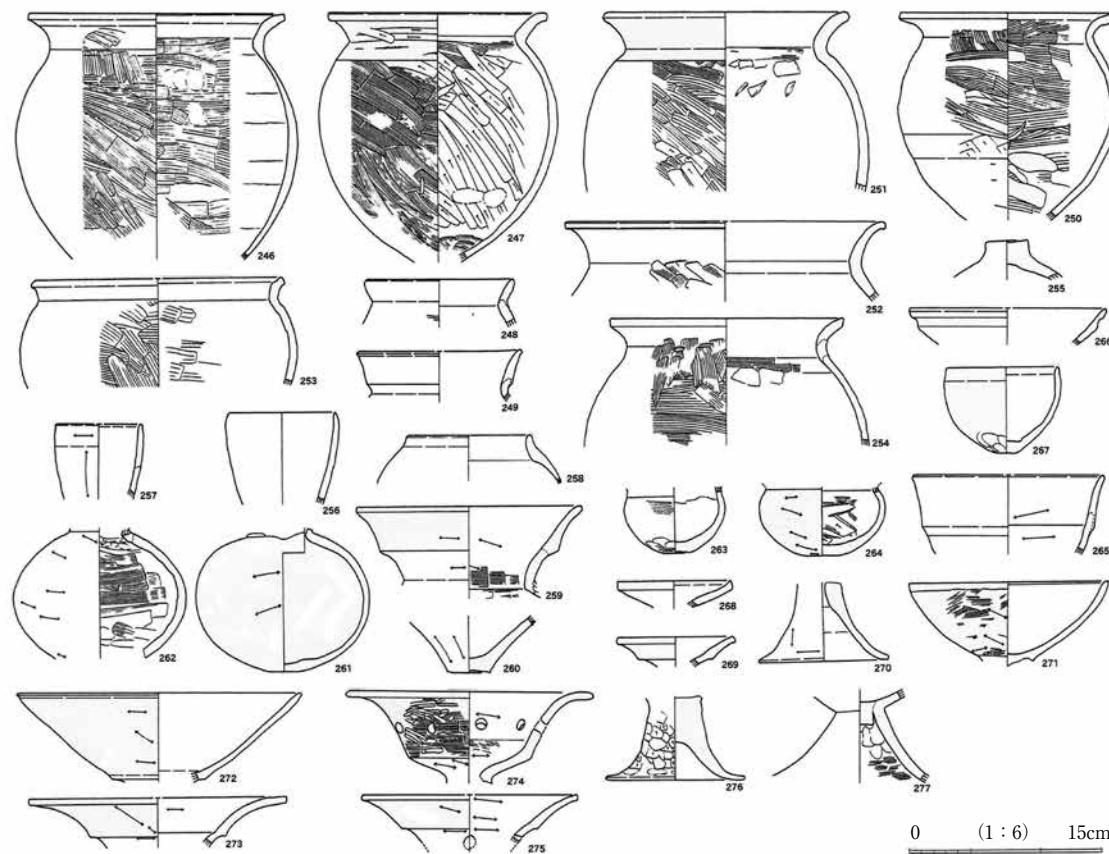
第5図 正尺C遺跡SI155出土土器(6期)



第6図 正尺C遺跡SI36出土土器(6期)



第7図 正尺C遺跡SI44出土土器(6~7期)

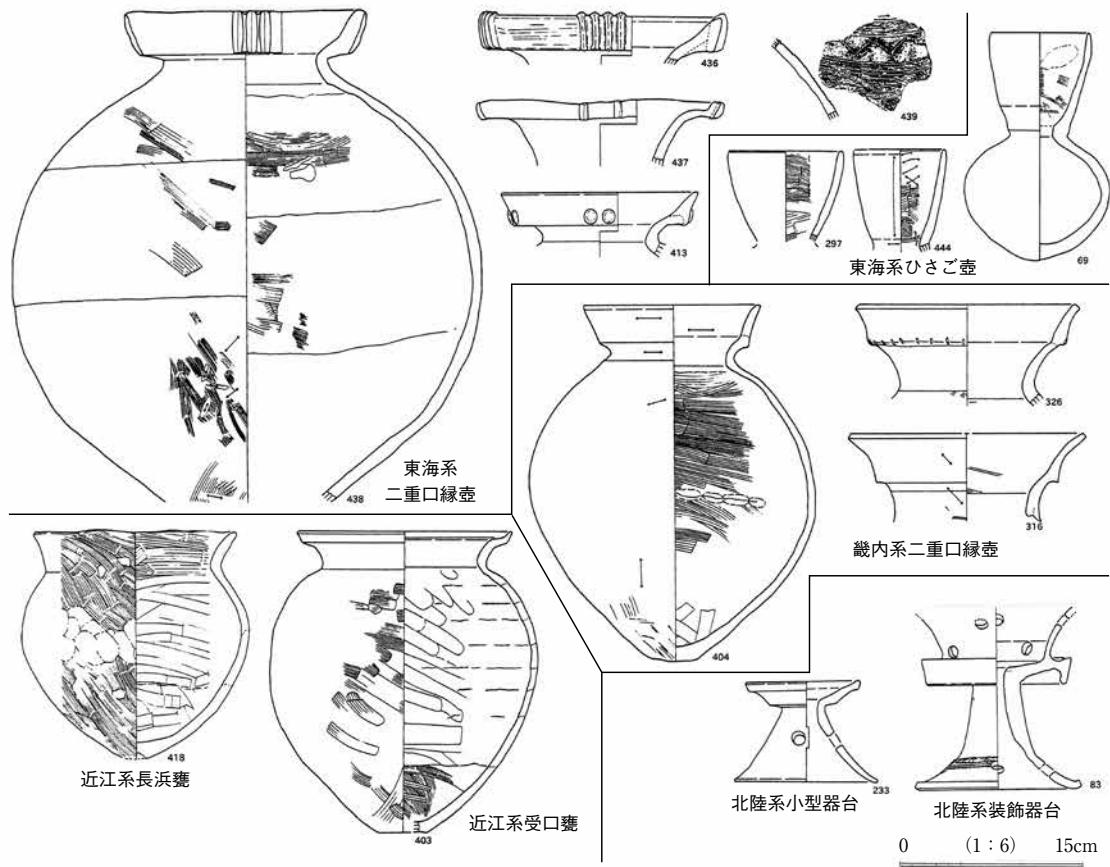


第8図 正尺C遺跡SI77出土土器(6~7期)

東海系ひさご壺 ([滝沢 2005a] H類) 東海系ひさご壺と在地土器の折衷形態 [川村 1993]。内弯ないしは直線的に立ち上がる細長い口頸部と、球形ないしは下膨れの胴部とからなる。

畿内系壺 ([滝沢 2005a] M・N類) M類は頸部が直立する二重口縁壺。5期以降、一定量認められる。

頸部が直立するものののみを一括し、文様の有無により I類：口縁端部や口縁有段部に、刺突や沈線等が巡らされたもの、II類：無文のものに細分されている。N類は二重に外反する二重口縁壺。2期には存在し、以降10期頃まで続く。内面段部の形態により、I類：内面の段部が明瞭なもの、II類：内面の段部が不明瞭なものに細分されている。316・326がM類で、このうち口頸部界に刺突が施さ



第9図 正尺C遺跡出土の外来系土器

れる 326 が I 類に分類されよう。404 が N 類である。

近江系甕 ([滝沢 2005a] E・F 類) 1 ~ 6・7 期頃まで認められるが、2 期以降の出土例は少ないとされる。

E 類: 近江系受口状甕と、F 類: 近江系長浜甕に細分されている。F 類は、口縁端部の作りが弱く波打ち、口縁端部までハケメが施され、口縁部には指頭圧痕が残る。403 は E 類、418 は F 類に分類される。

北陸系小型器台 ([土橋 2006] A 類) 北陸系小型器台。口縁部の立ち上がりが急な A1 類と、大きく開く有段口縁の A2 類に細分できる。233 は A2 類に相当する。

北陸系装飾器台 ([滝沢 2005a] D 類) 北陸南西部が分布の中心とされる装飾器台、またはその類似土器。受部・口縁部・脚部の形態で細分されているが、83 は受部の上下端が大きく突出する D I 類に分類される。

東北系壺・甕 繩文施文の壺・甕は、弥生時代後期からの系譜にある天王山系土器の最終段階の資料と考えられる (第 11 図)。詳細は、後述する。

(3) 繩文施文土器の特徴

正尺 C 遺跡から出土した繩文施文土器は、第 11 図でほぼすべてである。個別の観察所見は、第 2 表に観察表を転載したが、筆者が観察の上、改変した。なお、実測図についても見直し、一部については天地や傾きを修正した。修正した個体については、その旨を第 2 表に記載した。

胎土は、報告書で「大粒の石英・長石、ものによっては海面骨針を含むが、金雲母を含まない点で在地土器とは区別される。色調も在地の土器より黒味を帯び、一線を画する。」とされている。筆者も同様の所見を得ており、在地の土器と比べると異質であることは明らかである。

文様帶については、鈴木正博による基本構造概念図〔鈴木 1976〕（第 10 図）を基準に考えたい。しかし、正尺 C 遺跡においては、文様帶を捉え得る個体は少ない。503 は唯一、沈線が認められた個体である。報告書では「体部に横走する沈線が引かれ、その下に弧線が連続する文様構成が推定される。503b は拓本右上にも沈線らしきものがあるので、ほかの文様構成をとっていた可能性もある。」とされる。そのように考えた場合、第 11 図 503a～c に示したような文様帶構成になると考えられ、503bc は報告書と天地・傾きを修正する必要があった。個体で見れば、報告書の図化が正しいようにも見えるが、Ⅲ文様帶上部の構成を考えると修正することが適当と考えた。ただし、同一個体とされる底部と傾きが異なり、整合性については課題を残す。

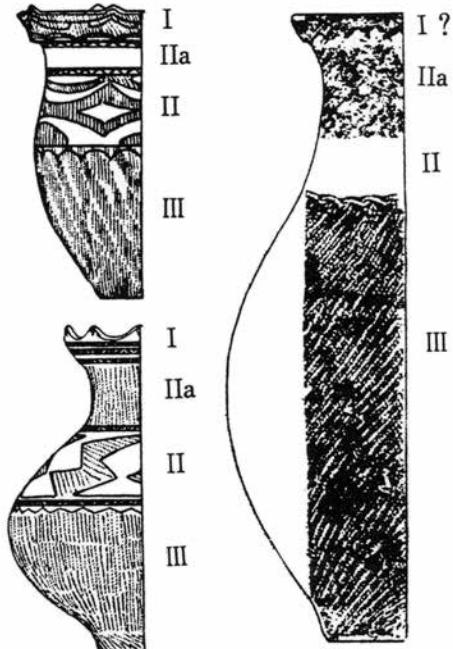
連弧文が細い工具で施文されていることも注目される。山形県内における弥生時代後期～古墳時代前期（4 期併行段階）の天王山式に後続する土器群の特徴は、「細い沈線で連弧文や羽状の撲糸文等施文」〔植松 2005〕にあるという。細い沈線による連弧文の存在は、正尺 C 遺跡の特徴と共に通するが、編年的にはより古い段階に位置付けられている。相互の年代関係に齟齬があるが、より後出する段階の天王山系土器の特徴を示すと考えられる。

504 は、頸部に相当するⅡa 文様帶が無文となる。同様の状況は 334 にも認められる。507a は有段の口縁の端部に刻みを施した個体、505b は口縁端部に縄文施文が施された個体である。

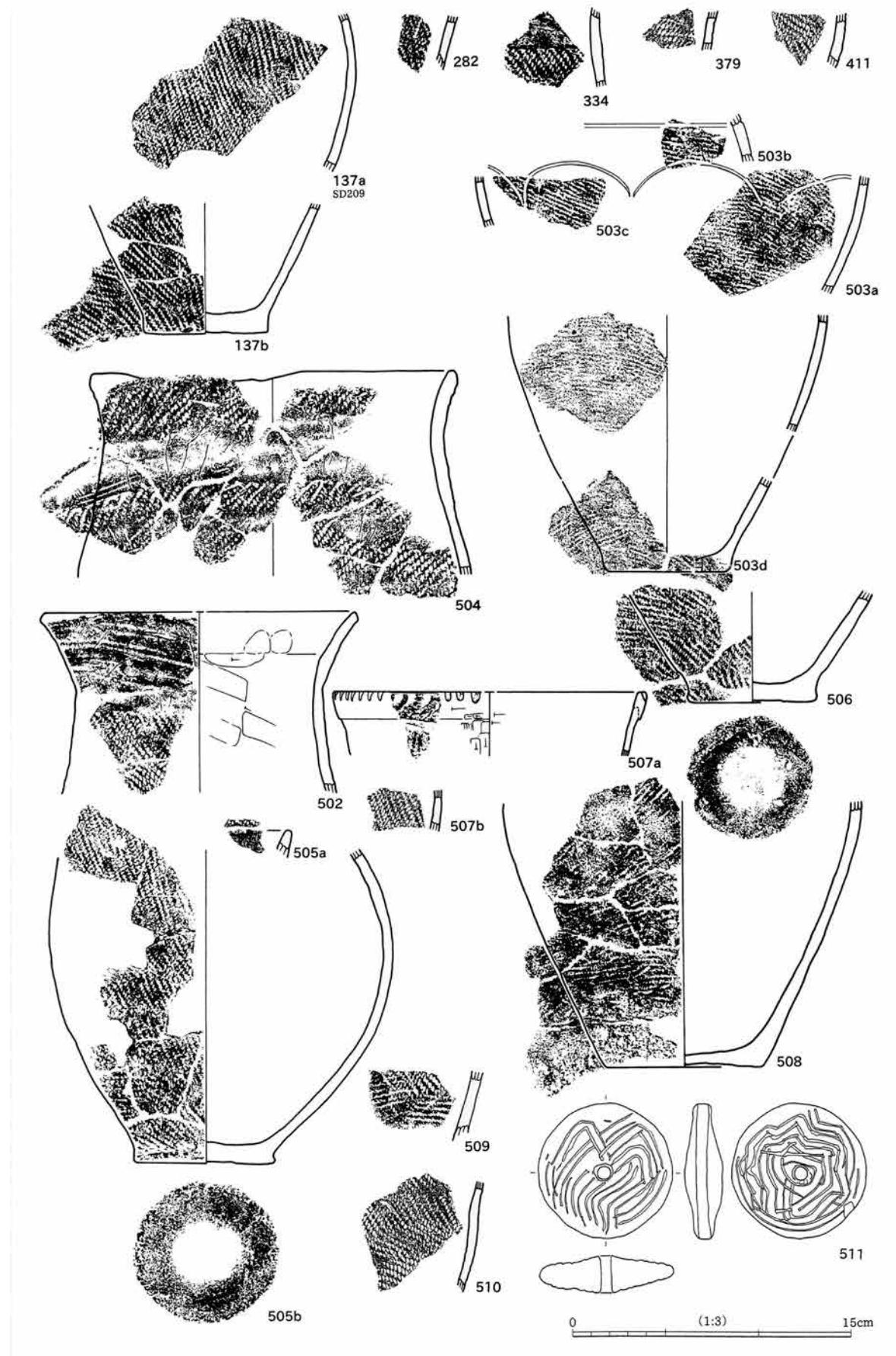
地文である縄文は、天王山系土器と同様に RL が主体を占め、若干の LR が認められる。また、504 の胴部最上段のみに附加条 LR が認められるが、装飾的な効果も考慮されている可能性があり、Ⅲ文様帶上部に対比できるかもしれない。また、条間がやや離れた個体（137b）や節が詰まった個体（503・506・508）が特徴的に認められ、単節縄文のみではない可能性もある。附加条や撲糸文も含まれるのかもしれない。

器形は、多くが壺と見られる。しかし、外面にススの付着が著しく、甕として使用されたものが大半を占めると考えられる。有段又はそれに類する口縁部を有し、頸部がややすぼまり、胴部最大径が上位に位置する。このような特徴は、天王山系土器の器形に共通する。しかし、全体的に部位間の境界が不明瞭になっており、変化に乏しい器形をなす。このことは、文様帶が崩壊していく過程と関連して理解することができよう。すなわち、文様帶の退化に伴い、各部界を明瞭に形成する必要がなくなったのであろう。

504 は、Ⅰ文様帶の幅が一定でなく、口縁部が緩やかに波打つことを考慮すると、波状口縁である可能性も考えられる。天王山式に顕著な口縁部の突起が形骸化した姿と見ることができるかもしれない。また、502 は頸部～胴部が垂直に近い傾きで図化されていたが、検討したところ胴部が若干外方に張り出すことが分かった。そこで実測図を修正したところ、壺を意識した器形となつた。胴部～底部は、505b のように最大径が下位に位置し、球胴に近い形態をなすものもある。底部は、やや上げ底状になっており、底面の拓本は円環状を呈する。



第10図 鈴木正博による文様帶
基本構造概念図



第11図 正尺C遺跡出土の縄文施文土器

報告No.	遺構名	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部	残存率	法量(cm)		口縁 残存率 (×/ 36)	胎土	色調		付着物	施文		備考
									口径	底径			内面	外面	内面	外面		
137a	SD209	10E25	弥生～古墳前期	甕	繩文	体部			6.6		石英・長石	にぶい橙色	灰黃褐色	内:コゲ、外:スス	ナデ	繩文RL、底部・無調整	天王山系(岡上復元) 傾き修正	
137b	SD311-715	11D16・17	4・M	弥生～古墳前期	甕	繩文	体部～底部	1/3	6.6		石英・長石	にぶい橙色	灰黃褐色	内:コゲ、外:スス	ナデ	繩文RL、底部・無調整	天王山系(岡上復元)	
282	SD114		弥生～古墳前期	甕	繩文	体部					長石	褐灰色	明褐灰色		ナデ	繩文RL	天王山系	
334	SD604	8F13	2	弥生～古墳前期	甕	繩文	体部				長石	にぶい橙色	褐色	外:スス	ナデ	繩文RL	天王山系 傾き修正	
379	Pit319	10D	覆土	弥生～古墳前期	甕	繩文	体部				石英・長石	灰褐色	にぶい褐色	内:コゲ	ナデ	繩文RL	天王山系	
411	SK23-9D7		古墳前期	甕	繩文	体部					石英・長石	灰褐色	黒褐色		ナデ	繩文RL	天王山系	
502		8D10		弥生～古墳前期	甕	繩文	口縁～体部		1/6 (17.0)		(8) 石英・長石	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内:コゲ、外:スス		口縁部:ヘラナデ、体部:繩文RL	天王山系 傾き修正	
503a～c		11D12・13	II下	弥生～古墳前期	甕	繩文	体部				石英・長石	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内:コゲ、外:スス	ナデ	口:ナデ、指頭正痕部:ケズリ、体部:ヘラナデ	天王山系 傾き修正	
503d		10D13、11D12	II上・II下	弥生～古墳前期	甕	繩文	体部～底部		6.4		石英・長石	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内:コゲ、外:スス	ナデ	繩文RL、底部:繩文RL→次線	天王山系(岡上復元)	
504		8D9・10D11	II下・III ～13・17	弥生～古墳前期	甕	繩文	体部～底部	2/3	19.5		29 石英・長石・チャート	灰白色	にぶい黄橙色	内:コゲ、外:スス	ナデ	ハケメー繩文RL、頭部:ナデ 口縁部:繩文RL、頭部直下:附加 奈UR 体部:UR	天王山系(岡上復元)	
505a・b		8C24		弥生～古墳前期	甕	繩文	口縁～体部				(1) 石英・長石	にぶい黄橙色	浅黃橙色	内:コゲ、外:スス	ナデ	口唇部:繩文、口縁部:ナデ、 体部:繩文RL、底部:ナデ	天王山系(岡上復元)	
506		9D10・12・16	弥生～古墳前期	甕	繩文	体部～底部	1/2	6.9			石英・長石	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内:コゲ、外:スス	ナデ	繩文RL、底部:ナデ	天王山系	
507a		9E13	II上	弥生～古墳前期	甕	繩文	体部		1/36 (17.0)		(1) 石英・長石	灰褐色	黒褐色	内:コゲ、外:スス	ケズリ	口縁部:繩文、刺突:ケズリ、ハケメ	天王山系	
507b		9E13	II上	弥生～古墳前期	甕	繩文	体部				石英・長石	褐色		内:コゲ	ナデ	繩文RL	天王山系	
508		16E1・5～8	II	弥生～古墳前期	甕	繩文	体部	1/4	8.5		石英・長石	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内:コゲ、外:スス	ナデ	繩文LR斜位、底部:無調整	天王山系	
509		9D11		弥生～古墳前期	甕	繩文	体部				石英・長石	灰黃褐色	にぶい黄橙色	内:コゲ	ナデ	繩文RL 上下:傾き修正	天王山系	
510		9E2	II下	弥生～古墳前期	甕	繩文	体部				石英・長石	灰褐色	灰褐色	内:コゲ	ナデ	繩文RL	天王山系	

報告No.	遺構名	グリッド	層位	器種	法量(mm, g)	胎土	色調	付着物	調整(施文)	
									表面	裏面
511		10E6	紡錘車		72.5	20.0	88.5石英・長石	明褐灰色	單狀工具による施文	單狀工具による施文

第2表 正尺C遺跡出土の繩文施土器一覧表([土橋2006]に加筆・修正)

以上のように、器形に共通性が見出せること、頸部であるⅡa文様帯が無文帯であること、Ⅲ文様帯上部に連弧文や附加条による装飾的な施文が認められることから、正尺C遺跡出土の縄文施文土器は、広義の「天王山系土器」の範疇に含まれると考えられる。しかし、口縁突起の不在または退化、交互刺突文の不在、口縁部における連弧文の不在、磨消縄文の不在、連弧文を含む文様帯の退化を考慮すれば、狭義の「天王山式」[中村 1976] とは明らかに区別すべき土器群といえる。これらの要素を勘案すれば、天王山式土器に後出する段階に位置付けられよう。共存する土器の編年的位置付けを考慮すれば、「天王山系」の最終末段階を示す可能性が高い。

これらの土器群を、新潟市八幡山遺跡出土土器をもとにした編年[渡邊 2001]と対比すれば、2期新段階～4期に位置付けられた土器に類似する。そして、報告書では6期以降、縄文施文土器は越後平野には残らないとされた。土器同士を比較すれば、八幡山遺跡の2期新段階～4期と併行すると考えることもできる。しかし、正尺C遺跡ではこれより新しい6期の土器群に同様の土器が伴う。このことを如何に評価するかが、議論の大きな争点となる。

なお、土製紡錘車511は、天王山系土器にしばしば伴う遺物であるが、後述する北関東地方の赤井戸式土器等にも伴う。当遺跡例と同様に、幾何学的な文様が刻まれ、前後の時期には顕著に見られない特徴的な様相を認めることができる。弥生時代～古墳時代前期の東北日本に、普遍的に存在すると考えられ、天王山系の遺物と単純に評価することはできない。ただし、正尺C遺跡例は、胎土の共通性から天王山系土器に伴う遺物であることは明らかであり、主体をなす北陸系の遺物ではない。

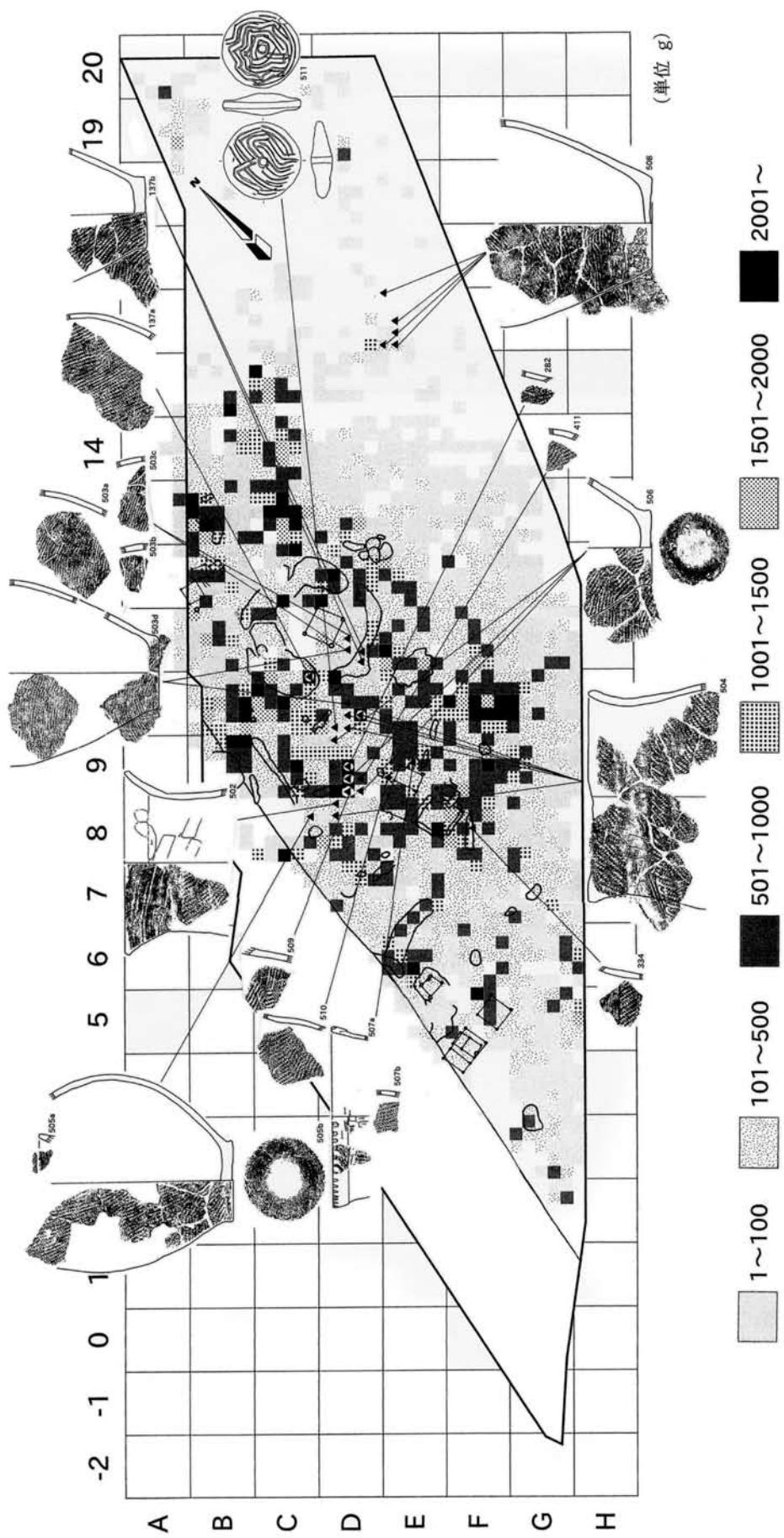
3. 縄文施文土器の出土状況

縄文施文土器は、調査段階でその存在を見出し、出土状況に注意を払いながら調査を進めた。遺構出土の資料は少なく、前述のとおり第11図で示したものでほぼ全量である。口縁部～底部までの資料が揃っている個体は無く、散布するような出土状況であり、共伴関係を断言できるものではない。

137・282・334・411が遺構出土資料であるが、このうち137が器形をある程度読み取れる大きな破片であるほかは、いずれも小破片であり、共伴関係を論ずるには十分な資料と言えない。137については、底部～胴部上半にかけての資料が認められ、器形をある程度復元できる個体である。これは平地建物SZ439の周溝から出土した土器に混在して出土したものであり、唯一、共伴関係を検討できる資料である。ただし、溝の覆土と不明瞭な盛土(M層)から出土したものがあり、遺構の年代を反映するとはいえない。SZ439は6期に位置付けられる遺構であり、6期以前の遺物であるという点までは言うことができる。一方、他の土器についても同様の出土状況が認められたことから、137の年代のみをこれから分離することには問題もある。

このような状況にあるため、遺物包含層も含めた出土位置について検討していきたい。各遺物の出土地点を示したのが第12図である。「▲」で示した地点が、縄文施文土器の出土地点であり、土器の重量分布の濃淡と重複する様子を理解できる。唯一、508のみが集落から外れた地点から出土しているが、周辺からは他の個体の出土も認められ、これを特別視することは適切でない。むしろ、分布が希薄な範囲においても、分布が重複することを重視すべきであろう。

次に層位的な状況を見ていきたい。11年度調査区においては、出土層位が明らかでないものが含まれるが、層位が明らかな遺物包含層の出土状況は、Ⅱ層1点、Ⅱ上層3点、Ⅱ下層4点、Ⅲ層1点であり(第2表)、やや下半に偏った分布を示すことが分かる。しかし、それほど大きな相違ではなく、この情報をもつ



第12図 正尺C遺跡出土土器重量別分布図と縄文施文土器の出土位置

て層位的な傾向を読み解くことはできない。なお、この状況は他の土器の出土状況にも共通する。

このように、平面的にも層位的にも、その他の土器の分布と重複することは明らかである。また、古墳時代前期以外の遺物は、平安時代の須恵器杯2点があるに過ぎない。このような出土状況を鑑みれば、縄文施文土器のみを別時期の遺物として分離する合理的な事由は見当たらない。これが、発掘調査担当者の所見である。

4. 古墳時代前期における縄文施文土器

古墳時代前期に縄文施文土器が遺構内で伴う事例は、新潟県域では狐森B遺跡や狐崎遺跡等において認めることができる。また、近隣地域では会津地方と群馬県北西部でも共伴事例があり、これらも検討対象とした。群馬県北西部については系譜が異なり、同じ議論の俎上に載せることそのものに問題もあるかもしれないが、同時期に伝統的に縄文施文土器が使い続けられる点では共通する。また、北陸系の土器が群馬県北西部に流入する状況も確認される。新潟県域と群馬県北西部の間では、編年の対応関係が不明瞭な面もあるが、参考資料として対比したい。なお、遺構内における出土位置を示した図面を併せて提示したが、縄文施文土器の出土位置に「○」印を付した。

（1）新潟県域

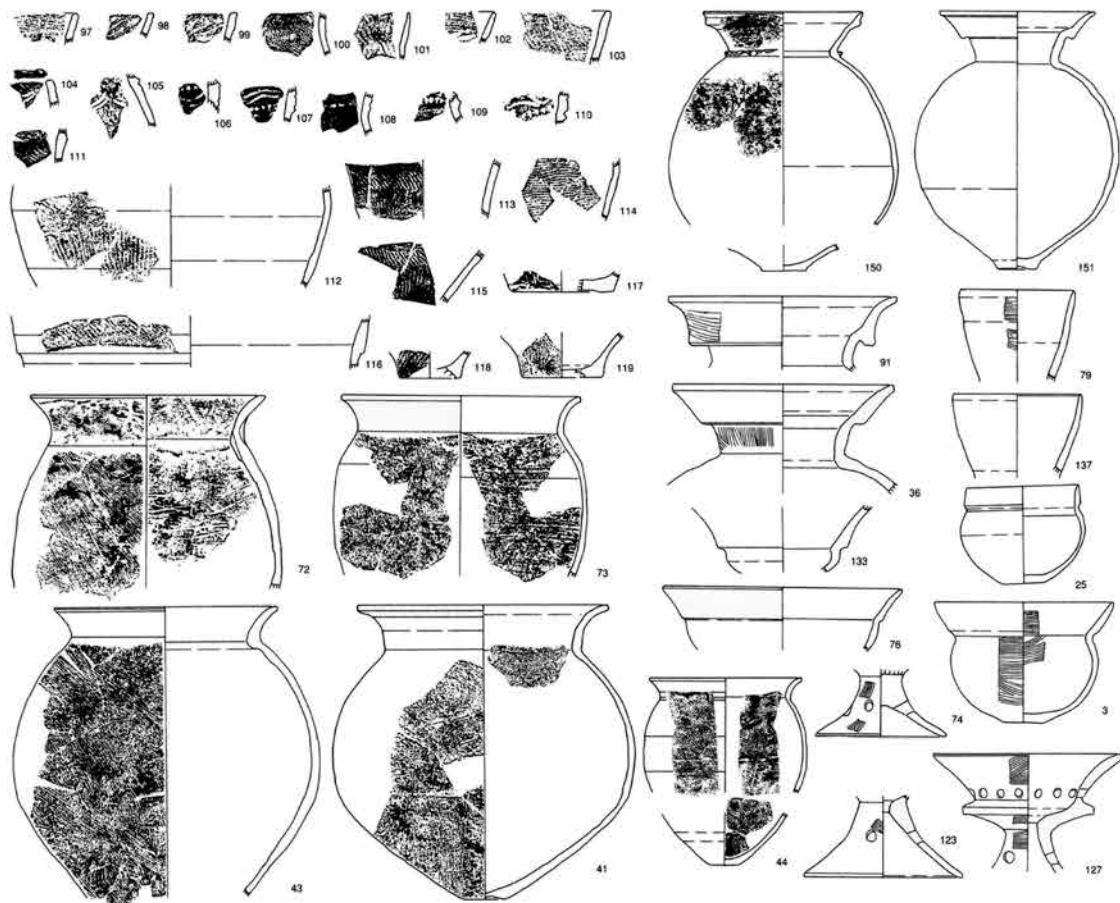
1) 大塚遺跡 [吉村 2002、水澤 2006]

胎内市大塚遺跡第2次調査（第13図）・第4次調査（第14図）では、7・8期の土器群に混在して縄文施文土器が出土した。いずれも小片であるが、第2次調査では285片、第4次調査では41片が出土している。いずれも遺構出土資料ではないものの、特に第4次調査では正尺C遺跡と同様に北陸系土器と分布を一にしており、他の土器群と時期差を認めることは困難とされた。そして、会津地方での共伴事例から、7期頃まで縄文施文土器が残存しても大過ないものとされた〔水澤 2006〕。一方、周辺で調査された同時期の遺跡において、縄文施文土器が伴わない事例もあるという問題点が指摘された。

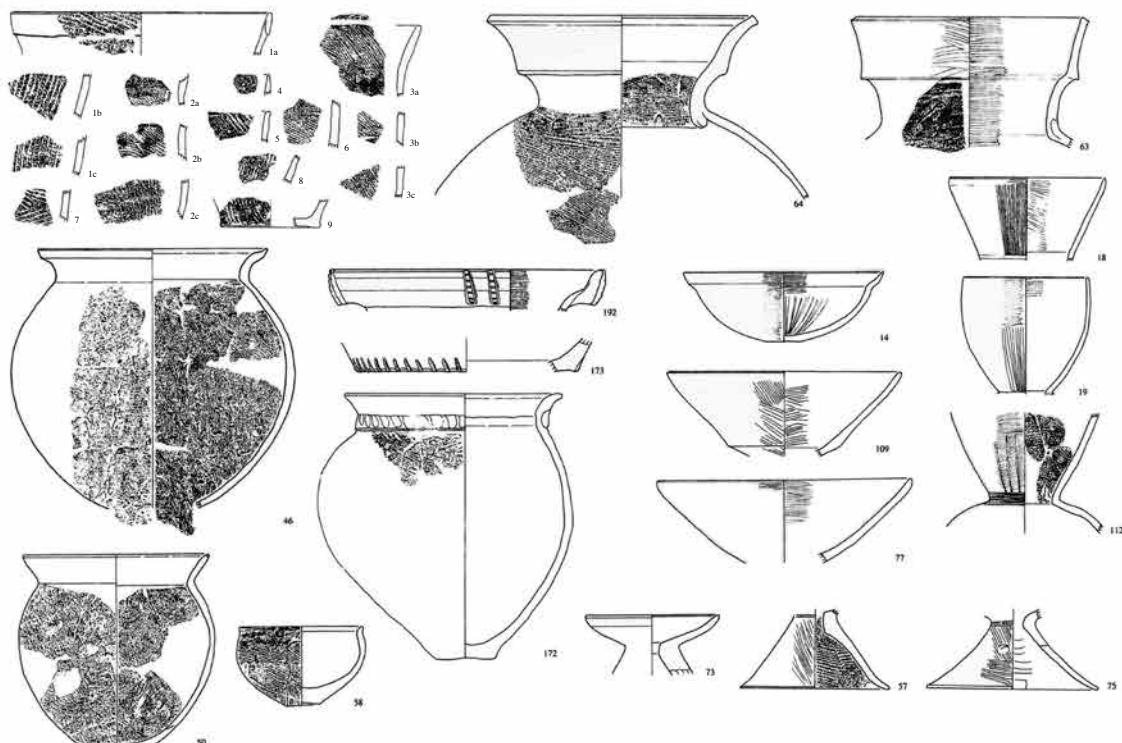
土器片は、いずれも小片であり、接合関係も認められないことから器形を復元できる個体は無い。断片的な情報ではあるが、口縁部が有段またはそれを意識した形態であること、頸部がすぼまり、胴部が膨らむことを読み取ることができる。縄文の原体はRLを多用するほか、LRと撫糸文rも認められる。また、条間が広い個体もあり、附加条を多用している可能性がある。文様帶は、I文様帶は縄文、IIa文様帶は無文、IIまたはIII文様帶上部に対応する刺突文や連弧文が認められる。IIまたはIII文様帶上部が出土したのは第2次調査分のみである。刺突文は交互刺突文が形骸化したものと見られ、天王山系土器でも後出的なものと見ることができよう。連弧文は太く、二重に重ねており、正尺C遺跡のものとは著しく異なる。水澤幸一氏のご教示によれば、第2次調査における縄文施文土器の出土範囲は、7・8期の土器群とやや離れるとのことであり、共伴関係については慎重に評価すべきかもしれない。一方、第4次調査分については、分布が重なっており、出土状況から両者を分別することはできないとのことである。正尺C遺跡と同様に、遺物包含層からの出土遺物が大半であるが、共存する可能性が高い一群と評価したい。

2) 狐森B遺跡 6号土坑 [田中・坂野井 2007]

新発田市狐森B遺跡では、墓坑と見られる6号土坑の下部から、新潟シンポ編年5～6期に位置付けられる広口壺9と共に、縄文施文土器が出土した（第15図）。報告書に詳述されており、以下、転記する。『8の附加条施文甕は、弥生時代後期に東北地方一円に分布した天王山系土器〔石川 2000〕の系譜をひくと考えられる。東北南部における天王山系土器には、天王山式に後続する屋敷式がある。天王山式から屋



第13図 大塚遺跡第2次調査出土土器



第14図 大塚遺跡第4次調査出土土器

敷式への変化は、器形面では、天王山式に明瞭な口縁の内湾や頸部の屈曲が弱まり、口縁部幅が総じて拡張する。文様においては、天王山式に特徴的な交互刺突文が形骸化する。地紋は附加条が多数を占め、ともに撲糸文も普及する〔石川 2001〕。8を見ると、天王山式土器の器形的特徴が崩れ、附加条を施文することからして、天王山系土器の中でも新しい段階と理解できる。ただし、頸部無紋帶は不明瞭なもの、附加条は口縁部から体部上半は斜行、体部下半は縦走となり、回転方向を変えることで文様帶を意識している様子がうかがえる。」

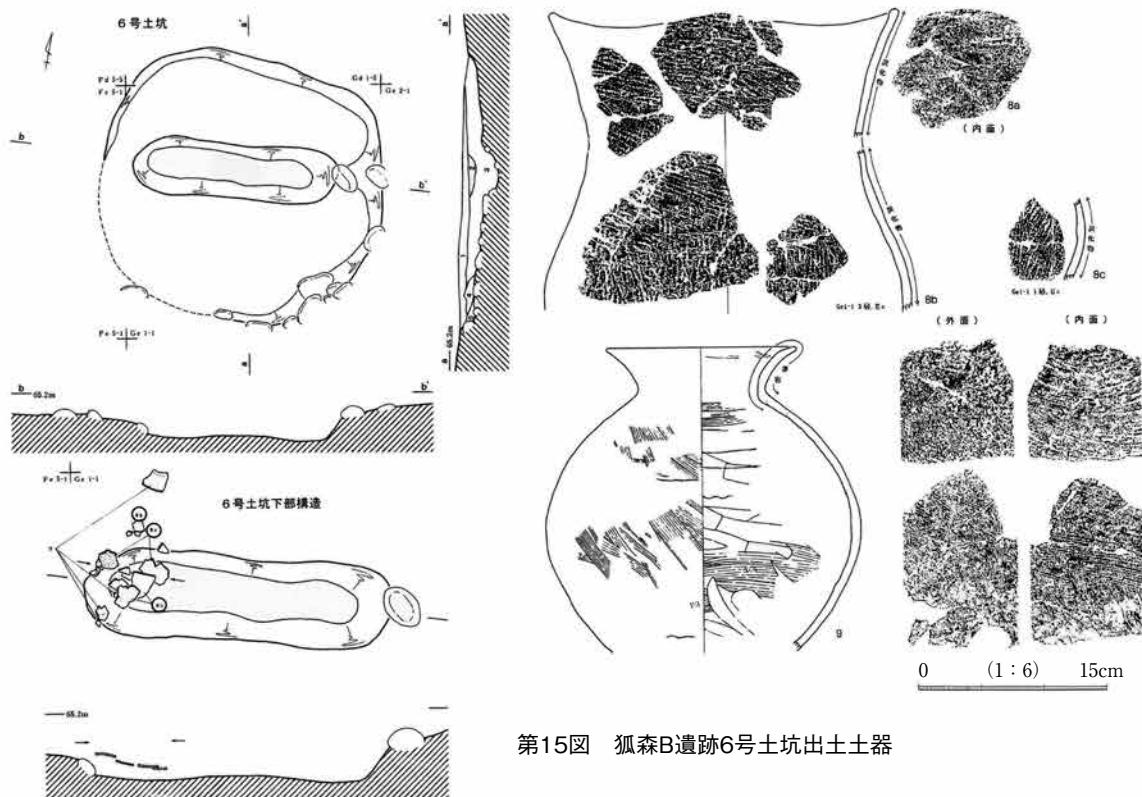
器形において、まず注目されるのは波状口縁である。これは、天王山式の口縁突起が退化した姿と考えることができよう。口頸部界には明瞭な段を設けず、頸部のくびれ・体部の張りが弱いならかな器形が想定されている。文様帶の退化に伴い、各部界を明瞭に示す必要がなくなったことが、このような器形を生んだ一因であろう。器面外面のほぼ全面に附加条 RL が施文されることから、条間が開く。また、条の向きを変えながら、天王山系土器の文様帶を意識した施文がなされていることが理解される。出土状況からは、5～6期に位置付けられる広口壺に伴うことは確実と見られ、天王山系土器の終末を示す資料の一つと評価したい。

3) 狐崎遺跡第1号住居址 [金子 1981]

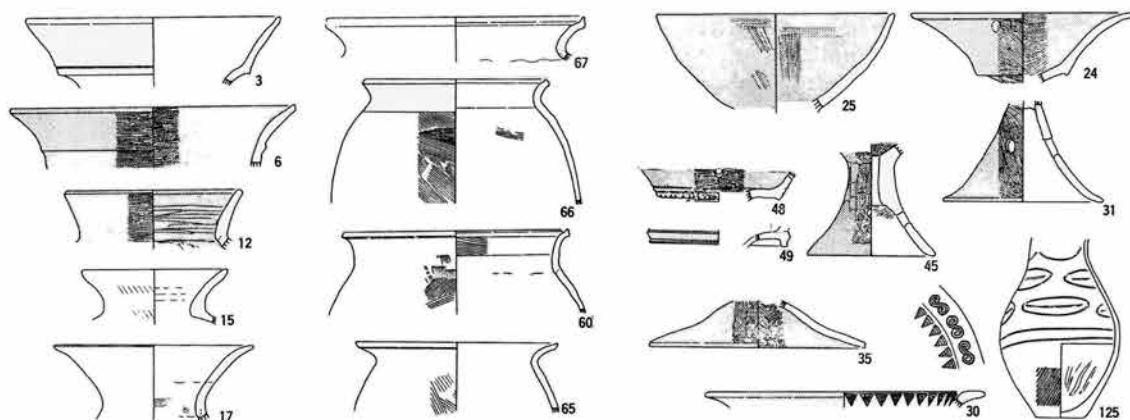
三条市狐崎遺跡においては、古墳時代前期の竪穴建物が検出されており、〔坂井・金子・川村 1993〕で遺物の出土遺構が明らかにされている。検出した3棟の竪穴建物のうち第1号住居址において、新潟シンボ編年5期の土器群が出土し、ここに「弥生土器」と報告された縄文施文の壺1点が伴う(第16図)。出土位置の詳細は不明だが、弥生土器の遺存率は高く、5期の土器群に共伴する可能性が考えられる。むしろ、弥生土器として、5期の土器群から分別したように見える。弥生土器として古式土師器から分離したことは、報告当時の常識的な判断といえる。本稿では、共伴するということも想定しつつ改めて検証してみたい。東北系の壺とされた125は細頸壺であるが、口縁部～頸部は残存しない。Ⅱ文様帶は間延びしており、頸部下半～胴部中位まで認められる。最上段に上開きの連弧文があり、その下位に横長楕円形の区画が2段重ねられ、「工」字状の空間が設けられる。そして、楕円形の区画には横走する沈線で、上下に分割されている。横長楕円形の区画は、上開きと下開きの連弧文を結合するように施文されたように見える。Ⅱ文様帶の最下位に2条の沈線が引かれ、Ⅲ文様帶には縄文(LR?)が施される。口縁部の様子は明らかでないが、横長楕円形の区画は連弧文が変形した姿と理解することもできる。したがって、天王山系土器であっても後半期の資料であることは確実と見られ、5期の土器に共伴すると考えることも可能である。〔坂井・川村 1993〕においても、縄文施文土器を5期に相当するⅡ-1期に位置付けている。

4) 横山遺跡第1号住居跡 [駒形ほか 1987]

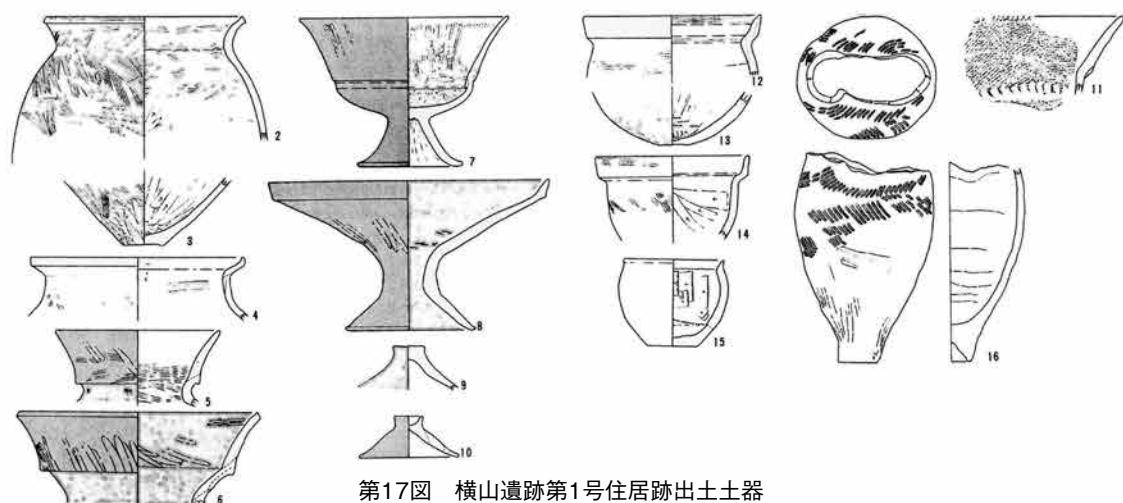
長岡市横山遺跡は、4～5期を主体とする高地性環濠集落である。第1号住居跡は、良好なまとまりをもつ土器群であり、4期の標識資料とされている〔滝沢 2005a〕。ここに2点の縄文施文土器が伴う(第17図)。11は口縁部に縄文 L R を施し、口縁端部と口頸部界に刻みを加える個体である。破片資料であり必ずしも明らかでないが、天王山系の器形をなすと推測される。16は異形土器である。床面下からの出土とされ、4期の土器に伴うかという問題が残る。しかし、竪穴建物の掘り込まれた床面の下位に16を包含する層位が存在するとは考えにくい。遺存率が高いことも勘案すれば、床下に埋め込まれた土器である可能性がより高い。器形は頸部がなく、口縁部の上面観は楕円形であり、一端に注ぎ口が認められる。文様帶は見られず、撲糸文 R が上半部施される。極めて特徴的な土器であり、〔坂井・川村 1993〕では「北海道系」と位置付けている。また、環濠からも縄文施文土器の破片が出土している。出土位置・層位が明らかでな



第15図 狐森B遺跡6号土坑出土土器



第16図 狐崎遺跡1号住居址出土土器



第17図 横山遺跡第1号住居跡出土土器

いため、検討の対象としなかったが、交互刺突文を有する土器が存在する等、より古い段階を示すものも認められる。

5) 衣田遺跡 [鶴巻・磯部 1990]

村上市衣田遺跡は、不時発見で確認された遺跡であり、その際、採集された土器が報告されている。5期前後の土器と縄文施文土器が採集されている。共伴関係は明らかでないが、比較検討する上で取り上げることとしたい。縄文施文土器は、弥生土器として紹介されている（第18図）。1は、口縁部片と胴部片が出土しており、壺の器形が復元されている。口縁部は段を持ちながら外反し、張りの弱い胴部から口縁部にかけては緩くくびれる。口縁端部は角ばかり、波状口縁気味になる。口縁部内外面は、粘土帶の継目が観察される。口縁部～頸部は無文で、縄文は胴部から底部に施される。縄文の原体は、LRを軸にRを2本絡めた附加条とされる。3は、有段口縁のI文様帶に縄文が施される。原体は、RLを軸にLを2本絡めた附加条とされる。衣田遺跡から出土した縄文施文土器の縄文原体は、いずれも附加条であることが特徴的であり、底部付近まで縄文施文されていることが6から理解できる。4は小破片であるが、いずれも細い沈線文が1条横走する。これらの縄文施文土器は、変化に乏しい器形をなすこと、文様帶が退化していることから、天王山系土器でも後出的なものである可能性が高い。採集資料であるため断言できないが、5期前後の土器群に伴うと判断することも可能と考えられる。

6) 居村C遺跡D地点 [渡邊 2001]

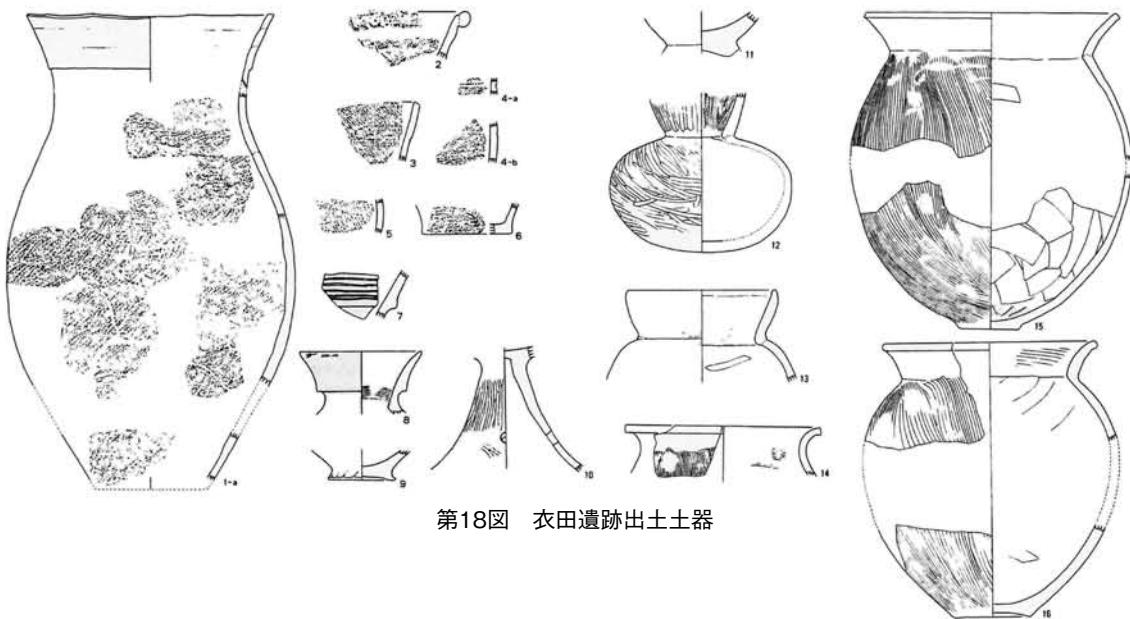
新潟市秋葉区居村C遺跡D地点は、八幡山遺跡から300mほどと至近に位置する。SKY1土坑出土土器が5期に位置付けられており、八幡山遺跡廃絶後に位置付けられている（第19図）。5期とするものの、縄文施文土器のみの出土であり、新潟シンポ編年との相関関係は必ずしも明瞭ではない。なお、遺物包含層からは7期頃の土器が出土しているが、遺構出土遺物との関係には言及できない。しかし、両者は近接した地点から出土しており、しかも分布の広がりは認められない。両者の共存を積極的に評価すれば、縄文施文の土器が7期頃まで残存することとなる。

7) 西谷遺跡 [宇佐美・坂井 1987]

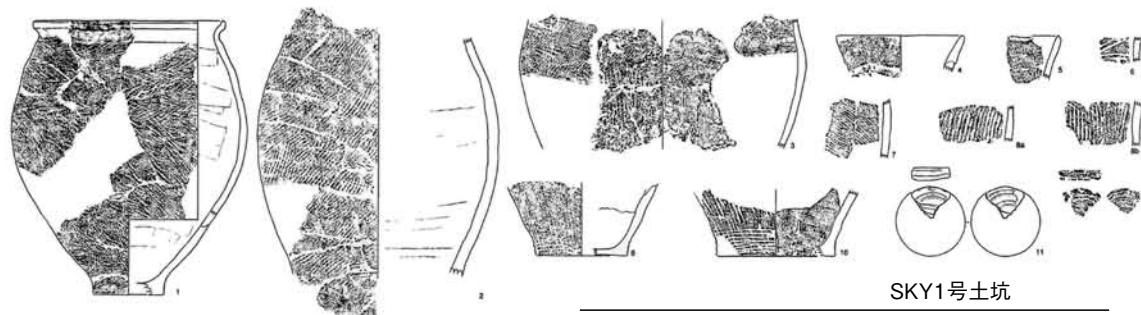
刈羽村西谷遺跡は、発掘調査により2～5期を主体とする集落であることが明らかにされている。縄文施文土器は、採集資料の中にある（第21図12）。口縁部～頸部上半を欠損しているが、残存状況は極めて良好である。頸部下半から胴部上半に形成されるⅡ文様帶には、横長長方形の区画を二重に重ね、「工」字状の区画を四単位設けている。長方形区画内には、横走するように刺突文が連続的に施される。大きな刺突列が中央に位置し、小さな刺突列がそれと平行するように充填されている。その下位に1条の沈線を引き、2つで一単位の刺突文が施されているが、Ⅲ文様帶上部に対比できるのであろう。モチーフは狐崎遺跡出土の細頸壺と酷似するが、文様帶の構成がより明確といえる。狐崎遺跡例と比べれば、より古相の特徴を示すと考えられ、共に採集されている2期の土器（第21図）に伴う可能性が想定される。採集資料であり共伴関係については言及できないものの、狐崎遺跡出土例と比較する上で重要な資料であり取り上げた。

8) その他

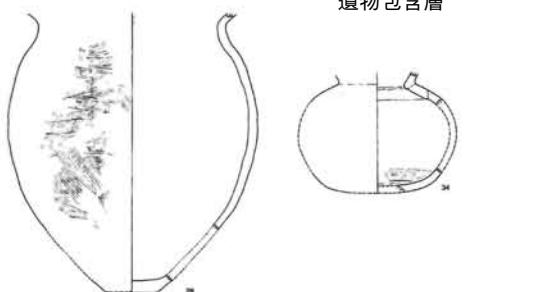
柏崎市高塙B遺跡 [金子・坂井 1983] では、7・8期を中心とする多数の土器の中に、「時期不詳」とされた縄文施文土器（第20図）がある。これは、稻荷塚遺跡SI01出土土器（第24図13）に似ており、古墳時代前期に属する可能性があるが、共伴関係を検討することはできない。新潟市西蒲区南赤坂遺跡では続縄文土器等の北方系土器が認められるが、8～9期に伴うものである [前山 2002]。系譜が異なること



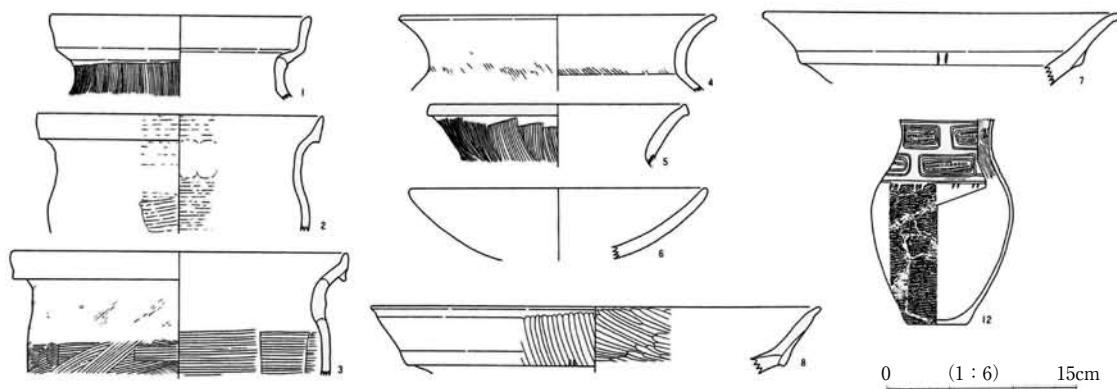
第18図 衣田遺跡出土土器



第19図 居村遺跡D地点出土土器



第20図 高塩B遺跡出土土器



第21図 西谷遺跡出土土器

から本稿の対象範囲に含めなかつたが、海岸沿いに北方の土器が局所的に搬入された様子を理解できる。

(2) 会津地方

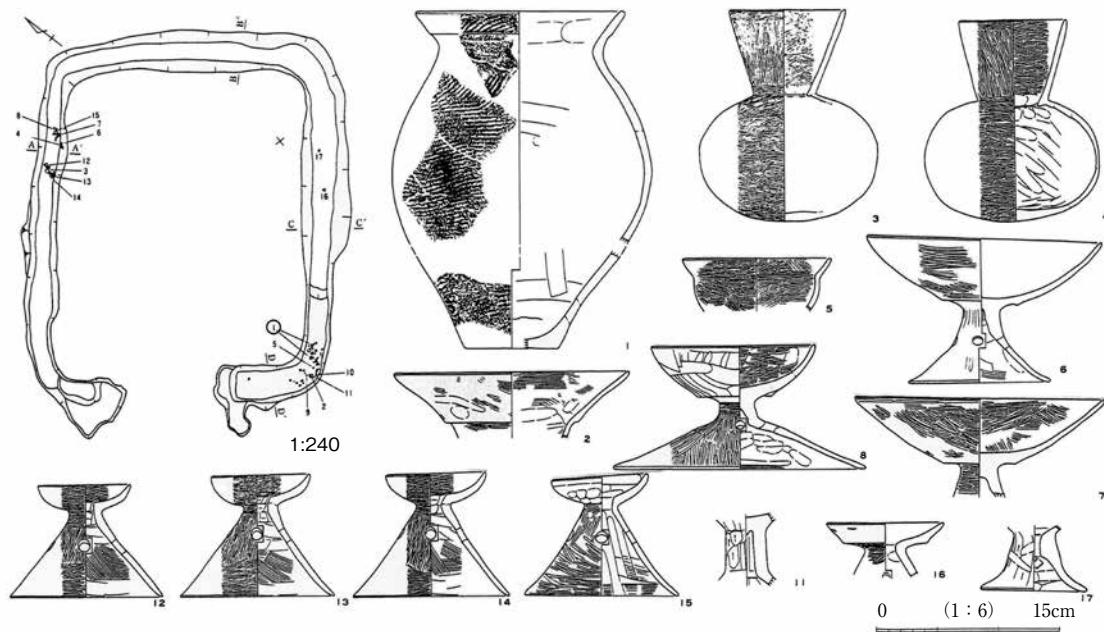
会津地方には、北陸系の遺物が多数認められ、縄文施文土器がそれに伴うとされる。中村五郎は、福島県では「稻荷塚資料のように月影式以後の段階まで縄紋を施す伝統がのこる。」[中村 1995a] とし、木本元治は、稻荷塚遺跡 SI01 の土器群の評価から会津地域では 5 期まで縄文・沈線文を有する土器が伴うことを指摘した[木本 2009]。会津地方は、「天王山式土器の影響を受けた在地の土器と日本海側（裏日本）系の外来土器が卓越・顕在化する点」が福島県内の他地域と異なるとされる[猪狩 2000]。特に、稻荷塚遺跡における共伴関係は、正尺 C 遺跡の評価において極めて重要である。出土状況も含めて検討していきたい。

1) 稲荷塚遺跡 [吉田ほか 1995]

福島県会津坂下町稻荷塚遺跡は、建物と周溝墓が検出された古墳時代前期の集落である。正尺 C 遺跡出土遺物を検討する上で極めて重要な遺跡であり、本稿では遺構一括資料における縄文施文土器の位置付けを行っていきたい。資料の年代観は、これまでに多数報告されているため、まずはそれらを第 3 表に整理した。ほぼすべての遺構から縄文施文の土器が出土しているが、細片である等、共伴関係そのものに問題が残るものもある。そこで、本稿では出土位置が明らかで縄文施文土器の残存率が高い遺構、特徴的な個体を伴う遺構から出土した土器群を検討の対象とした。検討の対象としたのは、周溝墓 SZ02・SZ06、竪穴建物 SI01・SI04ab・SI06・SI15 から出土した一括資料である。

遺構番号	吉田 1995	辻 1993	渡邊 2001	青山 2005	木本 2009	千田 2009	本稿
杵ガ森古墳	漆町 7 以降	新潟シンボ 7	漆町 7	新潟シンボ 7		新潟シンボ 7	
SZ01	漆町 7	新潟シンボ 6	漆町 6	新潟シンボ 7		新潟シンボ 5・6	
SZ02	漆町 7	新潟シンボ 6	漆町 6	新潟シンボ 7	漆町 5	新潟シンボ 5・6	新潟シンボ 6
SZ03	漆町 7						
SZ04	漆町 7						
SZ06	漆町 7			新潟シンボ 8	漆町 5		新潟シンボ 7~8
SZ09	漆町 7						
SZ10	漆町 7						
SI01	漆町 5・6	新潟シンボ 5	漆町 5	新潟シンボ 5・6	漆町 5	新潟シンボ 5・6	新潟シンボ 5~6
SI04a・04b	漆町 5・6			新潟シンボ 5~7	漆町 5(SI04b)	新潟シンボ 5・6	新潟シンボ 5
SI06	漆町 5・6			新潟シンボ 5・6		新潟シンボ 5・6	新潟シンボ 5~6
SI10	漆町 5・6					新潟シンボ 5・6	
SI11	漆町 5・6					新潟シンボ 5・6	
SI12a・12b	古墳中期			南小泉併行			
SI13	漆町 5・6					新潟シンボ 5・6	
SI14	漆町 7				漆町 5		
SI15	漆町 7			新潟シンボ 7	漆町 5~6		新潟シンボ 7

第3表 稲荷塚遺跡における各遺構の編年的位置付け

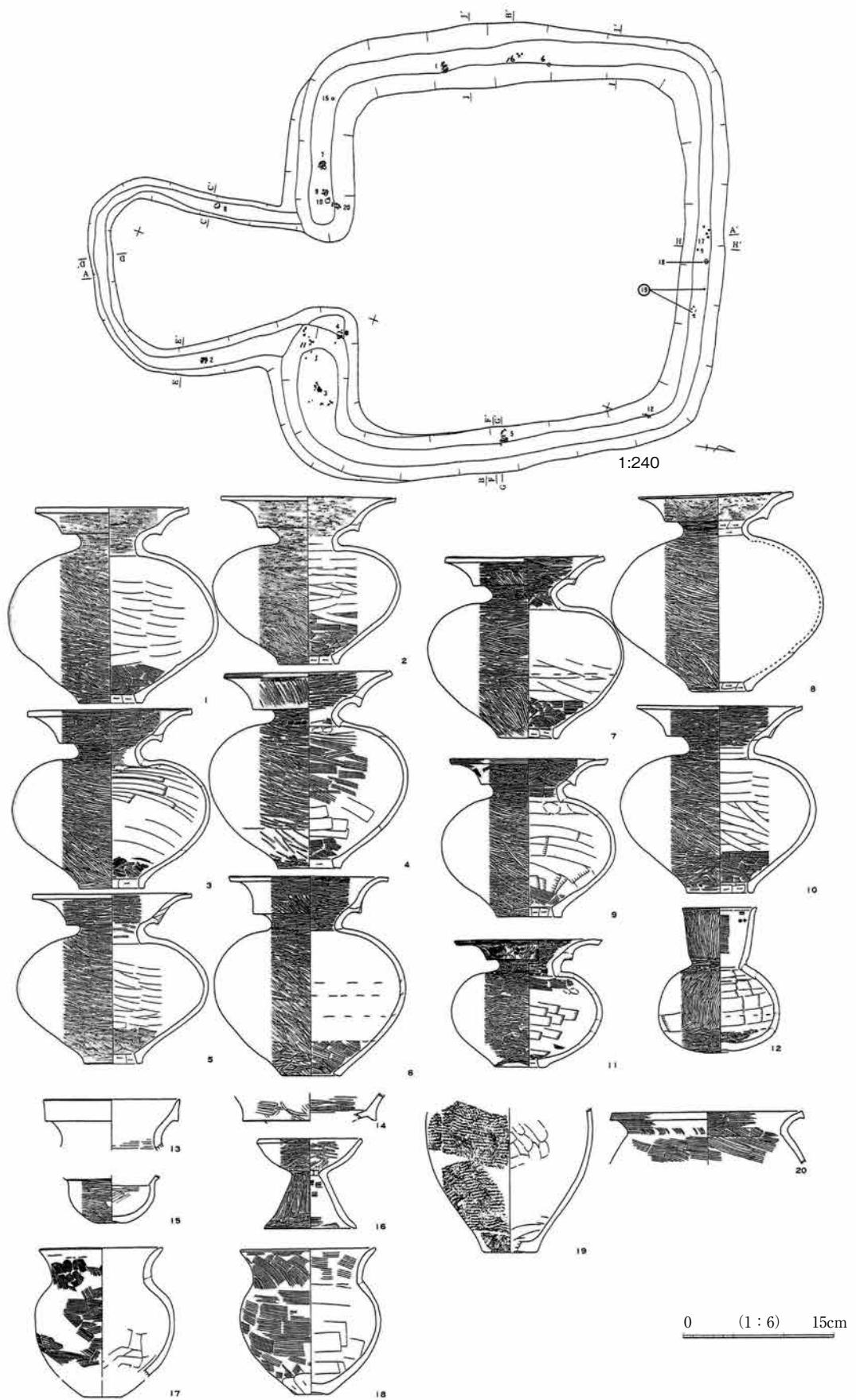


第22図 稲荷塚遺跡SZ02出土土器

SZ02 (第22図) 1は縄文施文の甕である。有段口縁で、頸部は無文、口縁部と胴部～底部に縄文が施される。2は二重に外反する畿内系の二重口縁壺で、内部の段部が不明瞭なN II類である。3・4は壺H類である。直線的に立ち上がる細長い口縁部と球形の胴部とからなる東海系ひさご壺と在地土器の折衷形態である。6～8は高杯C II類である。口縁部は内弯気味に立ち上がり、外面には段を有する。脚部は「ハ」の字を呈する。東海系の高杯で、5～7期に定量認められるものである。12～15は受部が内弯して立ち上がる小型器台N類で、脚部が「ハ」の字に開く。16は脚部から大きく外反して、有段の口縁部に至る小型器台H類で北陸系とされるものである。5～7期頃に認められる形態とされる。これらの土器群を総体的に見れば、6期頃に位置付けることが妥当であろう。縄文施文土器の出土位置は周溝内の南隅で、2・5・11等と近接して出土している。

SZ06 (第23図) 1～11は壺N I類である。二重に外反する二重口縁壺で、畿内系と考えられる。形態・法量の齊一性が高く、また赤彩されていることから、墳墓への供献土器であろうか。12は壺H類である。東海系のひさご壺と在地土器の折衷形態で、やや内弯気味に立ち上がる細長い口縁部と、やや下膨れの胴部からなる。13・14はN類の畿内系二重口縁壺である。16は、受部が内弯して立ち上がる小型器台N類である。17・18・20は「く」字甕である。端部が丸く収められるC3類(17・18)と、面取りされたC2類(20)がある。19は縄文施文の甕または壺である。胴部～底部に縄文が施文される。やや球胴気味の胴部は、正尺C遺跡505b(第11図)に共通する。青山博樹氏は[2005]で8期、[2004]で7・8期としており、稻荷塚遺跡における後出的な土器群と評価している。甕には、胴部の最大径がやや上位に位置する20があり、本稿では7～8期と幅を持って位置付けておきたい。縄文施文土器の出土位置は周溝北辺の中間部付近で、甕17・18が近接して出土している。

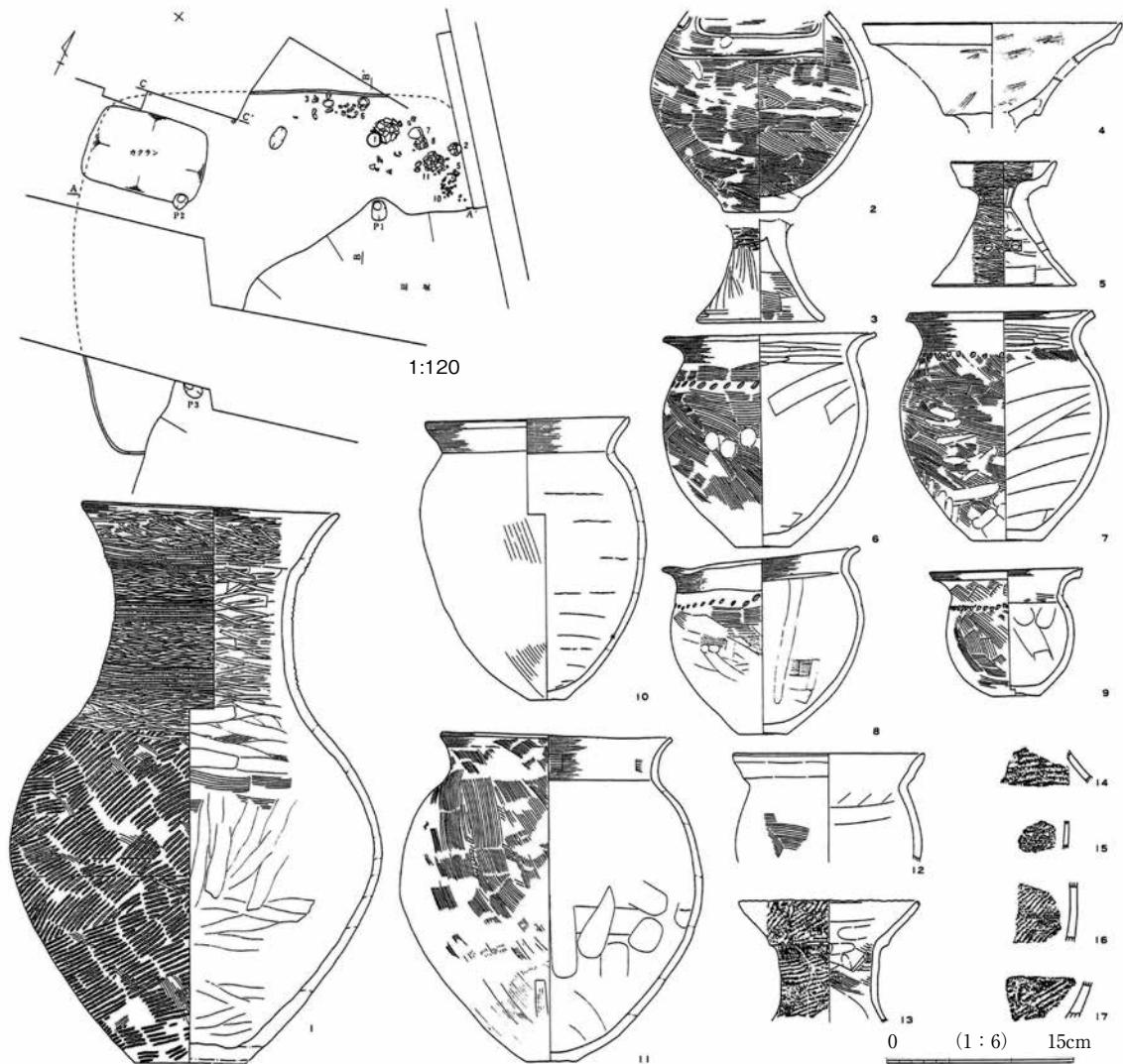
SI01 (第24図) SI01は、杵ガ森古墳の周堀に切られており、遺構の残存率は約5割である。隅丸方形の竪穴建物で、北隅付近から遺存率の高い個体がまとまって出土した。1は、外反する有段の口縁部を持つ細頸壺である。口縁部界・頸胴部界、頸部中位にそれぞれ5条の横走沈線が引かれる。口縁部～胴部最上位までミガキ調整され、Ⅲ文様帶は縄文施文されている。2は壺の胴部～底部である。全面がハケ



第23図 稲荷塚遺跡SZ06出土土器

メ調整されているが、Ⅱ文様帶に対応する部分に、沈線で横長の楕円形区画が設けられている。北陸系と天王山系の折衷形態と言えるかもしれない。4は器台と報告されているが、破損部の表現を見ると高杯である可能性が高い。器形も器台には見られない形態であり、高杯 A Ⅱ類に相当すると考えられる。[滝沢 2006] では、口縁端部を上端につまみ上げることを除けば北陸地方に主体的に分布する形態とした。そして、5～7期に拡散する北陸北東部系の土器の一つとした。一方、[中村 1995c] では、利根川上流域で同様の形態がまとまって認められることを指摘した。5は北陸系小型器台 F Ⅱ類である。6～9の甕は、口縁端部が面取りまたは上方につまみあげられ、肩部に列点文を持つものがあり、[青山 2005] の5・6期（会津I期）に位置付けられる。13は天王山系の壺である。平坦な有段口縁で、筒状の頸部を有する器形である。外面には縄文、内面にはハケメ調整が見られ、東北系と北陸系の折衷的な様相を示す。時期的にはまとまりを欠くが、本稿では総体的に見て5～6期頃のまとまりと理解したい。縄文施文の土器の出土位置は堅穴建物北東隅の土器集中部で、2・5・7・8・10・11と共に、潰れたような状態で出土している。

SI04a・04b(第25図) SI04aとSI04bの関係は、SI04bを拡張してSI04aが構築されたと理解されており、最終的な埋没段階はSI04aと考えられる。したがって、覆土内から出土した土器をaとbとで分離することには大きな意味は持たず、一括して捉えたい。1・2・4は二重に外反する畿内系の二重口縁壺 N Ⅱ類で

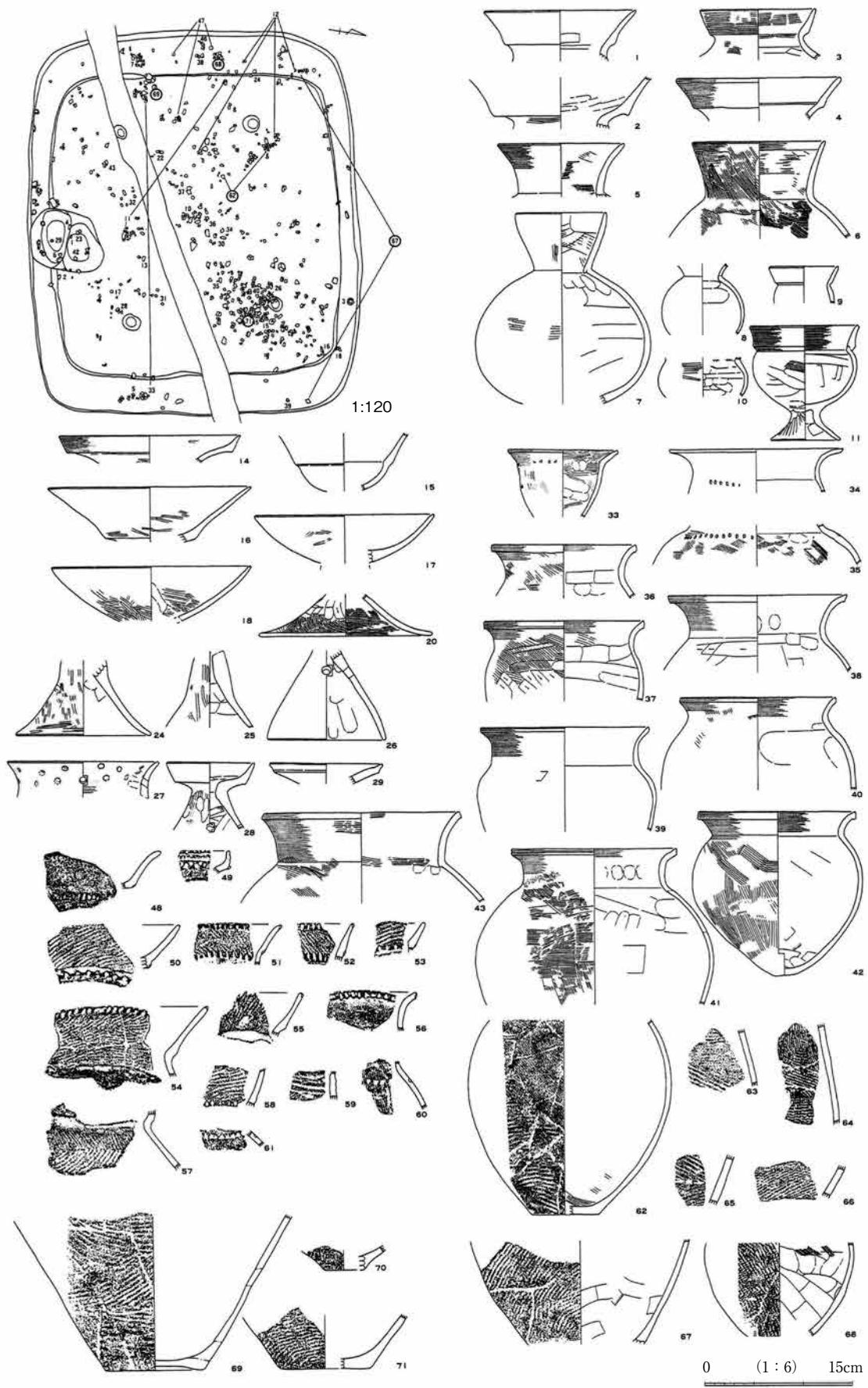


第24図 稲荷塚遺跡SI01出土土器

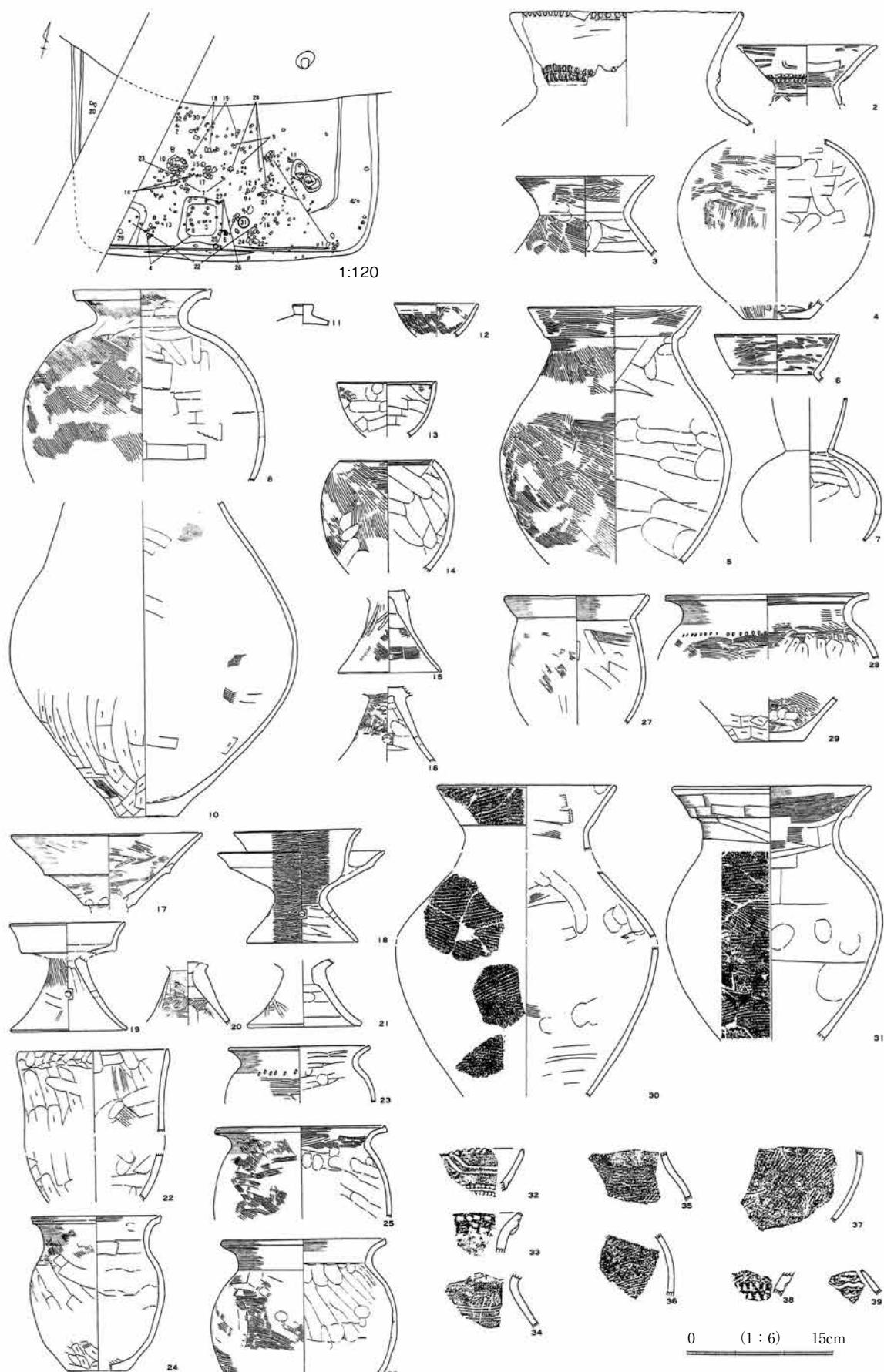
ある。5・6は短頸直口壺S類で、胴部の張り出しが弱くII類に分類できる。7は直線的に立ち上がる口縁部と下膨れの胴部からなる東海系ひさご壺と在地土器の折衷形態であるH類である。11は低脚を有する有段口縁鉢AII類である。2期に定量認められるようになり、5期頃まで残存するとされる。14～18は高杯の受口部である。14・16は口縁部が有段で外反・外傾するA類である。15は口縁部が外反する有段鉢形のB類であり、御経塚ツカダ型式に相当する。4期に出現し、7期まで主体的に存在するとされる。内面にも口縁の有段部分が認められ、5期頃に位置付けられよう。17・18は口縁部が浅く楕形をなすD類で、5期以降に認められるものである。29は上端で短く外反する受部からなる小型器台I類である。甕は、口縁端部が上方につまみあげられるもの、肩部に列点文を持つものがあり、また胴部最大径は上位に位置することから、[青山2005]の5・6期（会津I期）に比定できよう。縄文施文土器は破片が多いが、壺・甕が主体を占めるようである。口縁端部や口頸部界に刻みが施されることが特徴的である。また、肩部に刺突が認められる縄文施文の60は、北陸系との折衷的な在り方を示している。胴部には縄文が施文されるのみであるが、最大径が上半に位置するものと下膨れの球胴をなすものがある。これらの土器群は、有段口縁鉢AII類の存在を踏まえ、総体的に捉えれば5期頃に位置付けることが妥当であろう。縄文施文土器の出土位置は、62・67・68・69・71が明示されている。建物内に遺物が散在する中に混在するような出土状況を読み取ることができる。

SI06（第26図）1・2は、有段口縁の端部及び口頸部界に列点文が施される壺である。列点文は、口頸部界に2段重ねられており、交互刺突文が退化した姿のようにも見える。2はI文様帯とIII文様帶上部に沈線文による施文が認められ、IIa文様帯は無文である。これらは広義の「天王山系」に含まれるものであろうか。7は東海系ひさご壺と在地土器の折衷形態H類である。10は下膨れの壺胴部～底部で、器形は樽式系や赤井戸式と共に通する（第35図）。17は高杯AII類に相当し、SI01出土の第17図4と共に通する。[滝沢2006]では、北陸地方の5～7期に主体的に分布する形態とされている。18は、北陸系の装飾器台D類に共通性を見出せる。8・23～30の甕は、総じて胴部最大径が上位に位置し、口縁端部が上方につまみあげられ、肩部に列点文を持つ。[青山2005]でいう5・6期（会津I期）に認められる特徴である。5・30・31は、器形が極めて良く似た壺である。ここで特に注目したいのは、5と30・31の関係である。器形は同一であるが、5はハケメ調整のみ、30・31はハケメ調整に加えて縄文施文も認められる。器形は天王山式の系譜を踏むものと考えられ、いわば折衷的な在り方を示している。渡邊朋和によって提唱された「八幡山式」のような存在といえようか。これらの土器群を総体的に見ると、新潟シンポ編年5～6期頃のまとまりと理解することができよう。縄文施文土器の出土位置は31のみ明示されている。竪穴建物内に遺物が散在する中に混在するような出土状況を読み取ることができる。

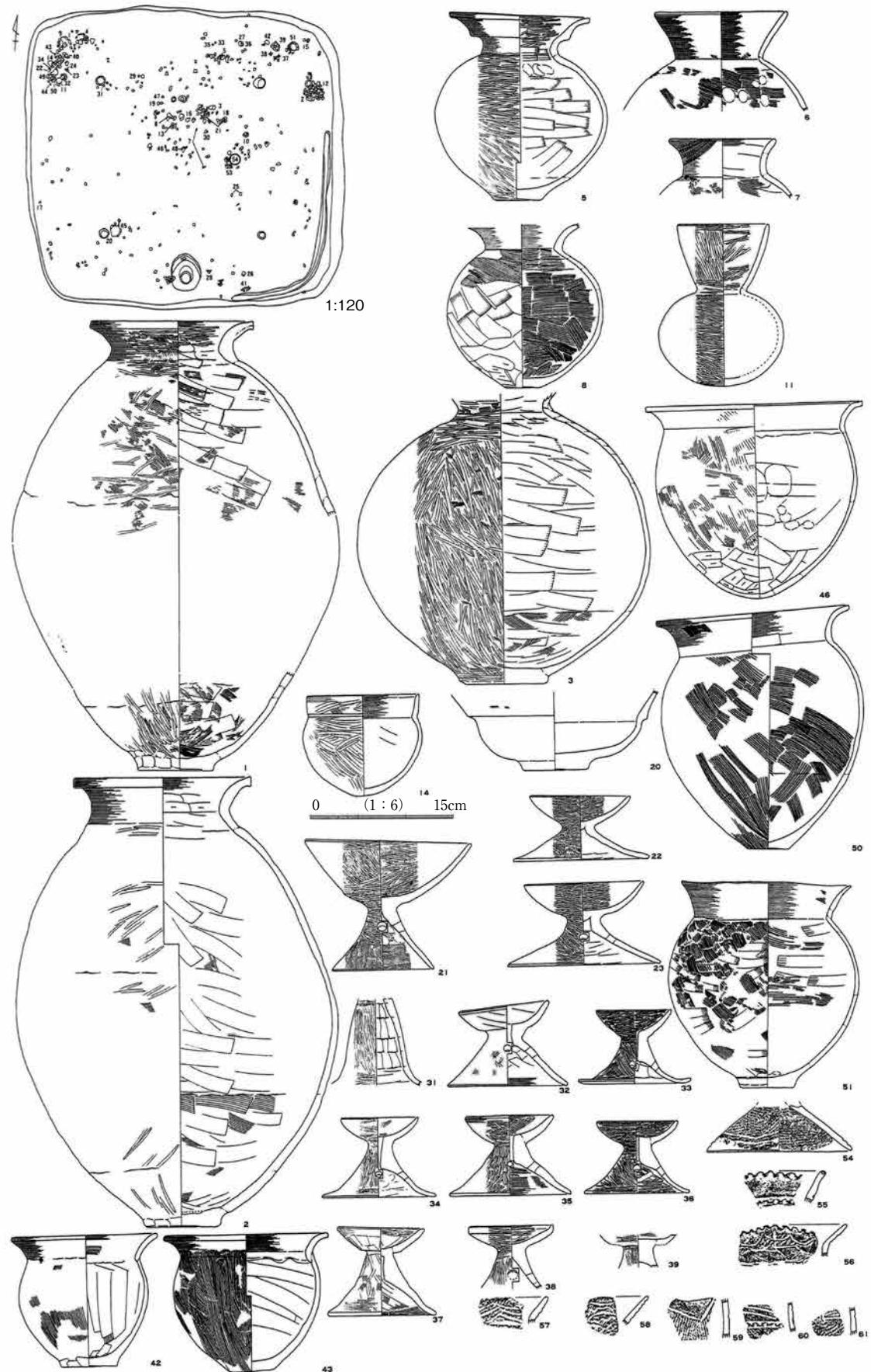
SI15（第27図）1・2は外反し端部がつまみあげられる口縁部、細い頸部、細長い胴部を有する極めて特徴的な個体であり、報告時に中村五郎により注意が払われている。[中村1995c]で、「特異な長胴壺は、何を祖形として生まれたか、奇異に感じていたが、案外、（群馬県）町田小沢遺跡21号住居跡発見の棗の実状の長胴の壺の影響なのかもしれない。」とした。指摘のとおり、長胴の壺は樽式系や赤井戸式に特徴的に存在する（第35図）ことから、地域を超えて等質的に比較検討することが必要となつてこよう。5は二重に外反する畿内系の二重口縁壺NII類である。6・7は短頸直口壺S類で、胴部の張り出しが弱くII類に分類できる。11は直線的に立ち上がる口縁部と球形の胴部からなる東海系ひさご壺と在地土器の折衷形態H類である。14は小型で短頸、かつ身の深い鉢E I類である。20は有段口縁鉢A類である。2期に定量認められるようになり、5期頃まで残存するとされる。21は高杯CII類である。口縁部は内弯



第25図 稲荷塚遺跡SI04a・SI04b出土土器



第26図 稲荷塚遺跡SI06出土土器

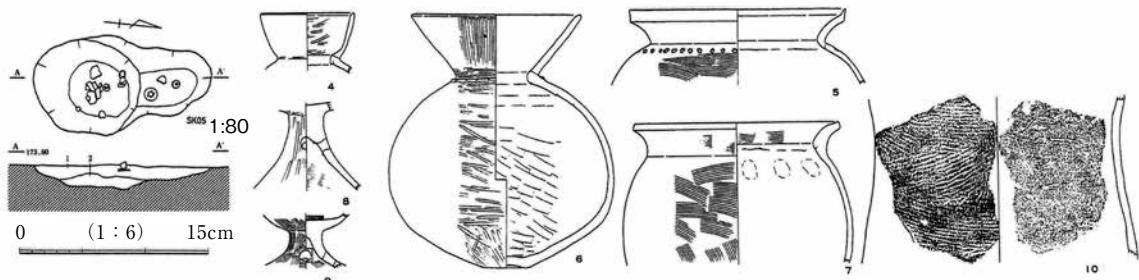


43
第27図 稲荷塚遺跡SI15出土土器

気味に立ち上がり、外面には段を有する。脚部は「ハ」の字を呈する。東海系の高杯で、5～7期に定量認められるものである。22・23は口縁部が浅く椀形の高杯D類で、5期以降に認められるとされる。脚部が大きく開くことが特徴的な個体である。31は畿内系屈折脚E類であり、8期以降に認められるとされる。32～36は受部が内弯して立ち上がる小型器台N類である。甕は胴部最大径が上位に位置するものも認められるが、51のように球胴化・平底化する個体も見られる。また、他の遺構に見られた肩部の列点文は見られない。甕の個体差が著しく、時期の詳細を論ずるのは難しいが、総体的には新しい様相を示すと考えられる。畿内系屈折脚の存在・甕の形態を考慮すれば、[青山2005]で示されているように7期頃に位置付けるのが妥当であろう。縄文施文土器は、いずれも遺存率が低い。I文様帶に連弧文が認められる個体がある(56～58)が、細い工具で施文している点は正尺C遺跡に共通する。一方、60には明瞭な交互刺突文が観察され、より古い様相も見られる。縄文施文土器の出土位置は脚部54のみ明示されている。堅穴建物内に遺物が散在する中に混在するような出土状況を読み取ることができる。他より明らかに新相を示す畿内系屈折脚31も、縄文施文土器と同様に遺物が散在する中に混在するような出土状況にある。したがって、共伴関係については、他の遺構よりも慎重に評価しなくてはならない。

2) 中西遺跡 [和田1990]

福島県会津坂下町中西遺跡は、古墳時代前期前半の集落である。第5号土坑において、新潟シンポ編年5～6期に対応できる壺・甕・高杯・器台と共に縄文施文土器が1点認められた(第28図)。甕には、口縁端部が上方につまみあげられ、かつ肩部に列点文を持つものが認められる(5)ことから、[青山2005]では5・6期(会津I期)に比定されている。報告書を見る限り、縄文施文土器はこの1点のみで、弥生時代・縄文時代に遡る遺物の出土は認められない。縄文施文土器は、壺と報告されており、正尺C遺跡出土の第11図502のような器形であろうか。縄文の原体は、撚糸文とされている。



第28図 中西遺跡第5号土坑出土土器

(3) 北関東地方

北関東地方には、古墳時代前期まで縄文施文土器が多数残存する。群馬県赤城山南麓地域を中心として関東地方北部一帯に分布する弥生時代後期～古墳時代前期に位置付けられる型式に「赤井戸式土器」がある。土器の表面に縄文が施文されるということが最も大きな特徴の一つである[小島1996]。赤井戸式でも最も新しい段階に位置付けたⅢ期には、S字状口縁台付甕・小型器台との共伴関係が認められるという[小島1983]。小型器台は、小型丸底土器を加え「小型丸底土器群」として古墳時代土師器成立の指標の一つとされており[岩崎1963]、S字状口縁台付甕と共に古墳時代前期の遺物として評価されている。小島純一は、これらの土器の共伴関係をもとに、赤井戸式Ⅲ期を古墳時代前期中葉頃に位置付けた[小島1983]。また、近年では共伴土器の分析から、古墳時代前期に存在することが明確に指摘されている[深

澤 1999・2000、入澤・加部 2000 等]。

赤井戸式土器とほとんど同じ内容をもった型式に「吉ヶ谷式土器」がある。関東地方西部、特に埼玉県比企地方とその周辺に濃密な分布を示す吉ヶ谷式 [熊野 1996] は、赤井戸式とほとんど同じ内容をもった土器群であり、ほぼ同じような変遷を示すとされる [小島 1983]。そして、赤井戸式Ⅲ期は、柿沼幹夫がいう吉ヶ谷式Ⅲ期 [柿沼 1982] に併行するという。吉ヶ谷式土器は、弥生時代後期の土器型式とされる [熊野 1996] が、[柿沼 1982] では赤井戸式土器の研究動向も鑑み、編年表（同論文 66 頁）ではⅢ期を弥生時代末～古墳時代初頭に跨るように示している。

また、北関東地方には、櫛描文の伝統を残す土器も古墳時代前期まで残存する。関東地方北西部に分布する「樽式土器」は、弥生時代後期の型式である。最終段階のものは古式土師器の標徴である S 字状口縁台付甕等との関係の検討が必要とされている。また、赤城山南麓では後述する赤井戸式と混在したり、両方の特徴を持った個体もあるとされる [外山 1996]。すなわち、樽式の最終段階は古墳時代に入り込むと考えられ「樽式系」と呼ばれている。利根川上流域と会津地方の関係については、中村五郎が重要な指摘をしている。中村は会津地方の長胴壺と樽式系の壺との形態的共通性を指摘し、会津地方と利根川上流域の編年の関係について検討する必要性を指摘した [中村 1995c]。この所見には極めて重要な問題を含んでいるが、その後、積極的に議論の俎上に上った形跡は見られない。会津地方を介し、現段階では不明瞭な北陸地方と北関東地方の編年の対応関係を検討することができるかもしれない。

若狭徹・深澤敦仁は、古墳時代前期古段階を 5～7（古）期に併行すると考えるが、主体を 6 期とした。そして、この段階まで「樽式系」及び「吉ヶ谷式系（赤井戸式系）」が組成に加わるとした [若狭・深澤 2005]。いずれにせよ、縄文を施文する赤井戸式（吉ヶ谷式）の最も新しい段階は、6 期頃まで下ることは確かと見られる。本稿では、これらの代表的事例である群馬県大屋 H 遺跡・内堀遺跡群（下縄引Ⅱ遺跡）における一括資料を具体的に見ていただきたい。

1) 群馬県桐生市大屋 H 遺跡 [加部 1998・2000]

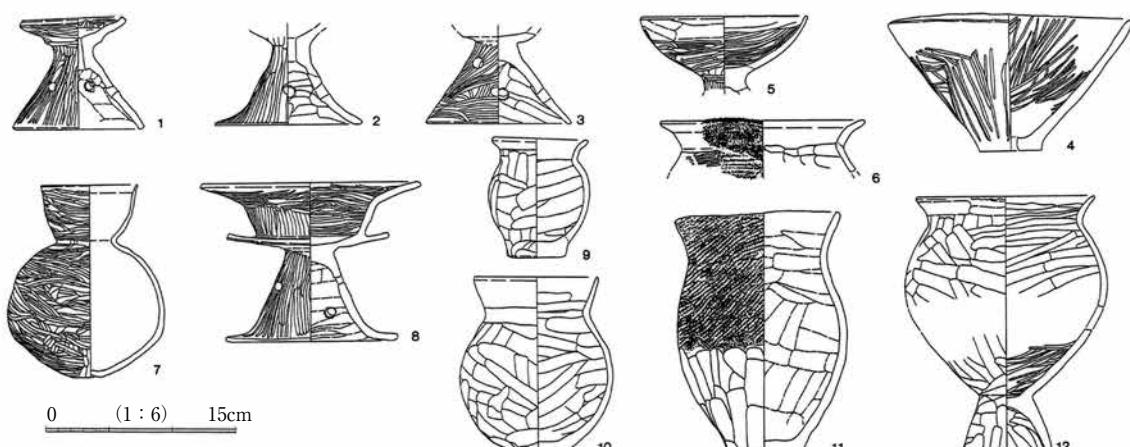
群馬県桐生市（旧新里村）大屋 H 遺跡では、居館を巡る溝から出土した一括資料が注目される（第 29 図）。縄文が施文される赤井戸式土器の甕と畿内系のタタキ甕（6）・東海系のひさご壺（7）・小型器台（1・2）・高杯（3）が同レベルで出土している。また、建物内においても、赤井戸式土器に北陸系の結合器台（8）等の外来系土器が伴う。赤井戸式土器は、弥生時代後期まで遡るとされていた [小島 1983] が、最古とされる事例にも古式土師器が共伴しており、弥生時代まで遡るか疑問視されている [加部 1998]。共伴する外来系土器について、東海地方の編年関係にあわせると廻間Ⅱ式（新潟シンポ編年 5・6 期併行）に相当するとされている。図化されている小型器台・結合器台については、正尺 C 遺跡 SZ439（第 4 図）・SI36（第 6 図）に共通性を見出すことができ、6 期に併行すると見ることができよう。現在、提示されている資料を総体的に見れば、6 期前後の一括資料と考えたい。

2) 群馬県前橋市内堀遺跡群（下縄引Ⅱ遺跡）[園部ほか 1989、加部ほか 1993、前原 1991、加部 2000]

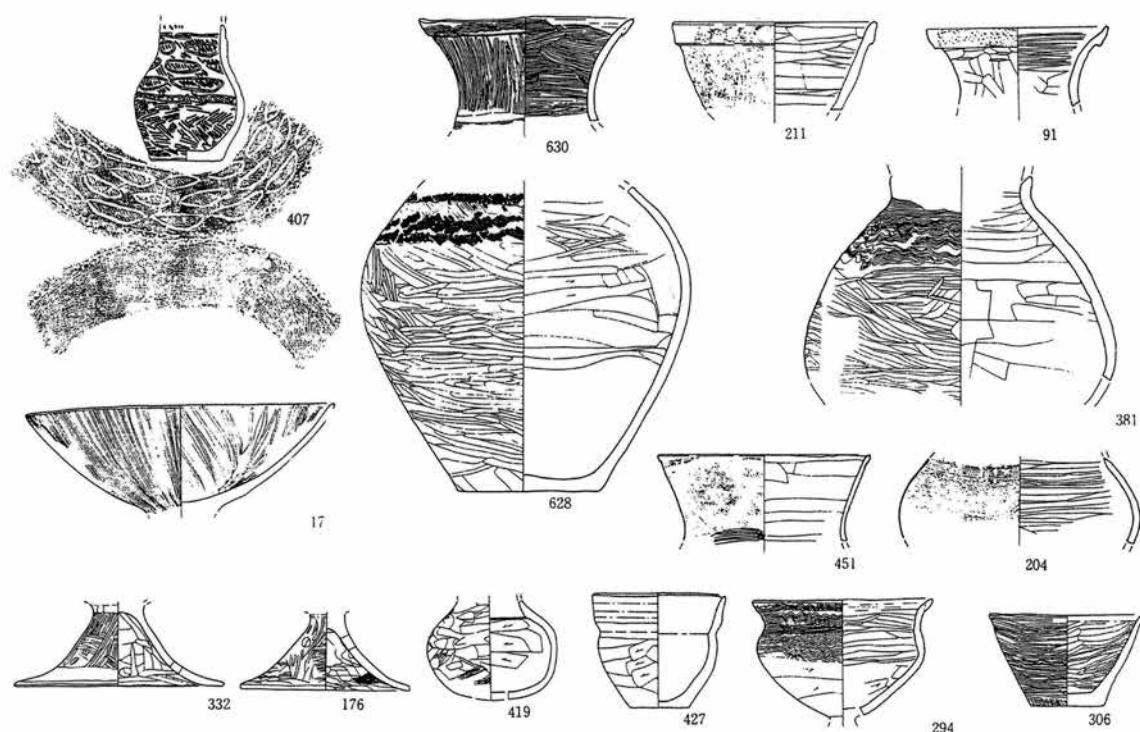
内堀遺跡群（下縄引Ⅱ遺跡）では、浅間 C 軽石（As-C）純層を覆土に含む竪穴建物と、降灰後に構築されたテフラを含まない竪穴建物が認められる。As-C の降下時期は、新潟シンポ編年 5～7（古）期に併行すると考えられ、6 期前後に位置付けられると見られる [若狭・深澤 2005]。As-C は、新潟シンポ編年との対応関係を探る上で重要な指標の一つとなる。

竪穴建物内からは豊富な土器群が出土しており、「東北系・北陸系・東関東系・東海系の土器が、在地の弥生系譜の土師器と共に関係にある。特に、H-15（第 30 図）出土の壺 407 は胴部の磨消縄文や交互刺

突文の特徴は『弥生式土器集成』の PL-23.No.16 に掲載されている白河市天王山遺跡出土品に器形及び模様構成が酷似しており、天王山式土器の範疇で捉えられる」〔加部 2000〕とされている。交互刺突文が退化・形骸化しており、「天王山式」の範疇に入るか否かの判断には問題も残るが、その系譜にある土器であると考えられる。また、横長の楕円形区画が設けられる在り方は、狐崎遺跡 1 号住居址出土土器（第 16 図 125）や稻荷塚遺跡 SI01 出土土器（第 24 図 2）に共通する。稻荷塚遺跡例はハケメ調整の土器であり、単純に比較することはできないが、器形や文様帶においても共通性が認められる。第 21 図に示したとおり、樽式系土器が存在すること、器台の脚部が大きく開く状況を〔若狭・深澤 2005〕と対比すれば、5～7（古）期（6 期頃）に位置付けられる。覆土には As-C が認められることからも、6 期前後に位置付けることが妥当と考えられる。



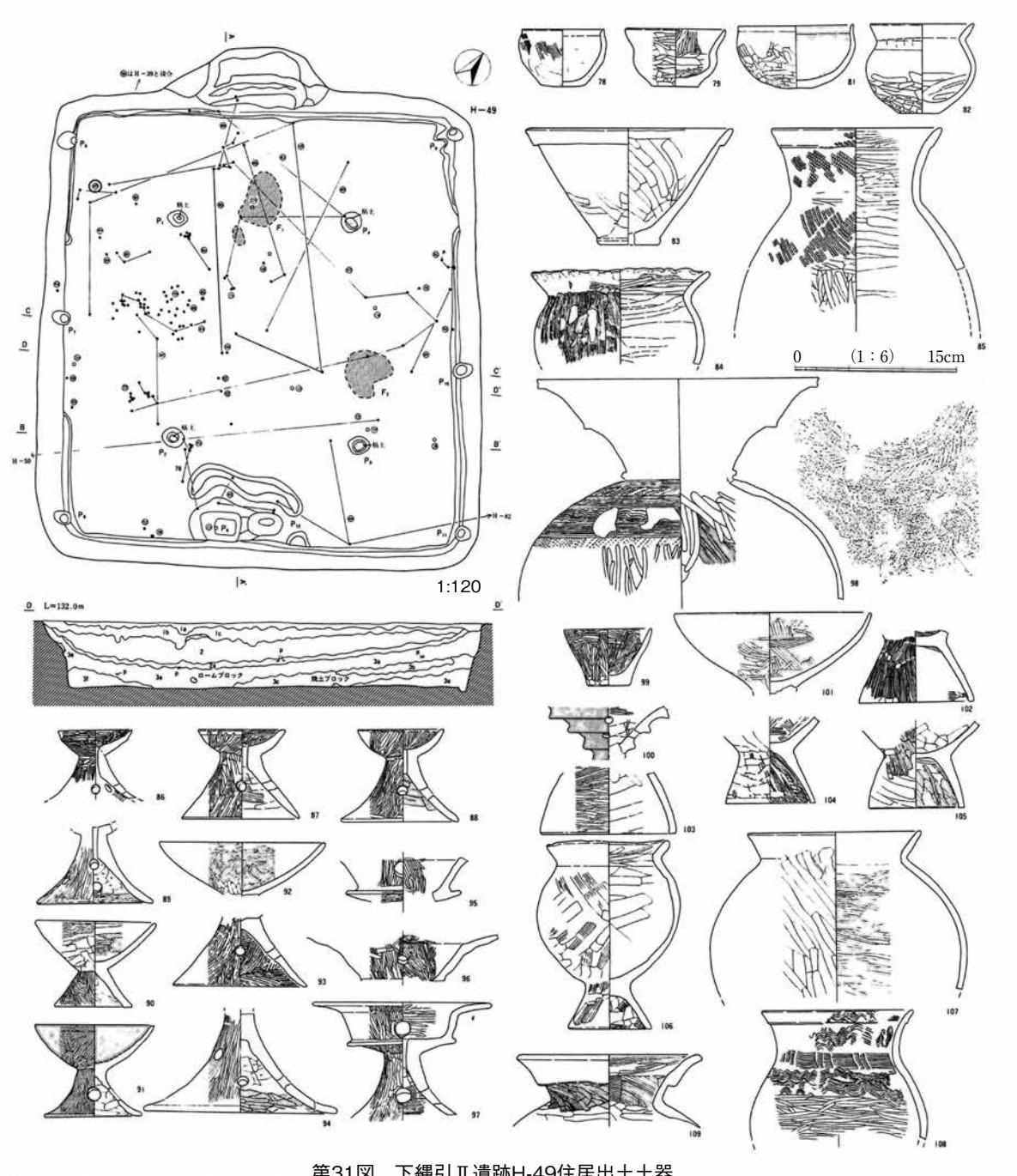
第29図 大屋H遺跡出土十器



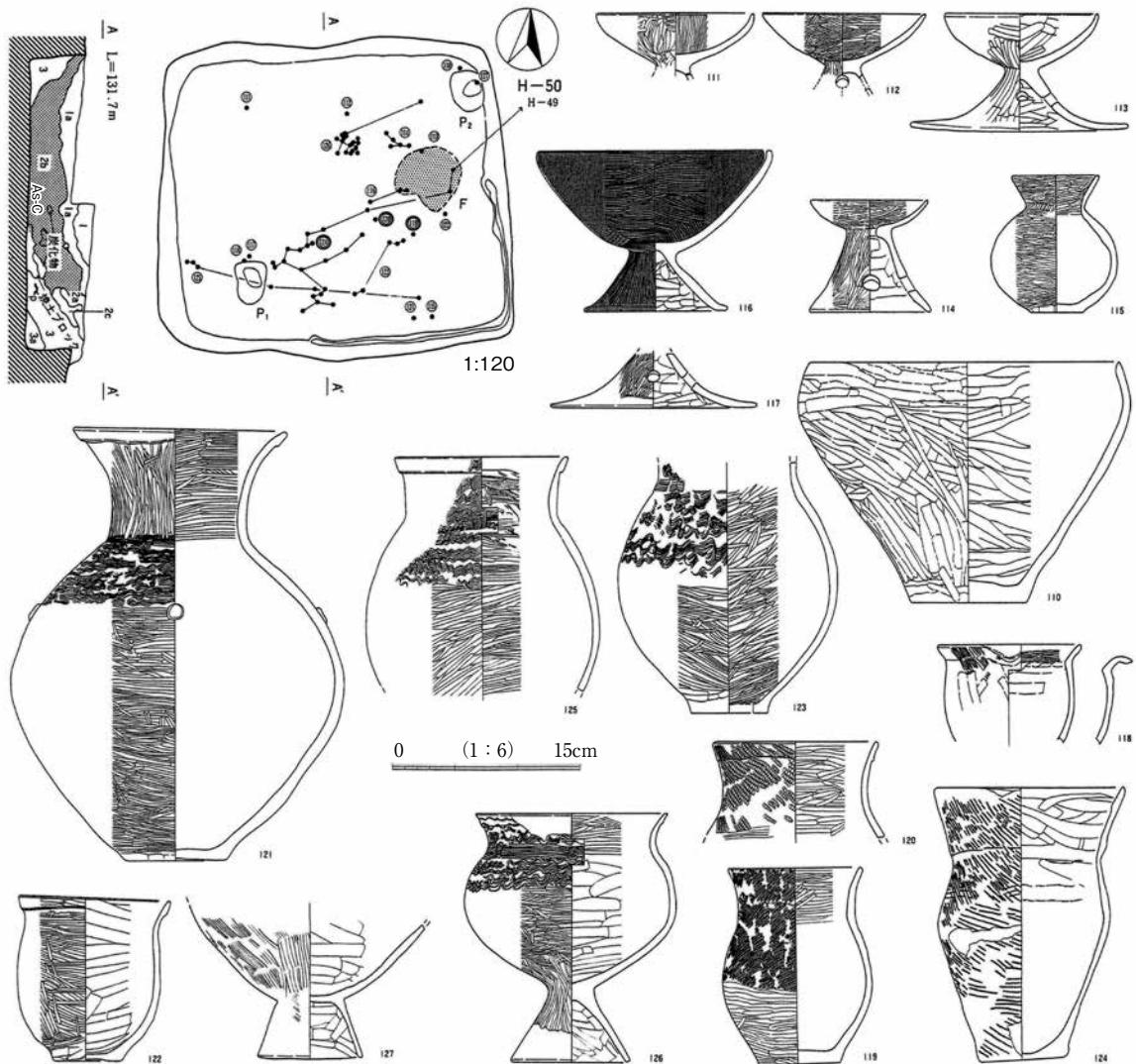
第30図 下縄引Ⅱ遺跡H-15住居出土土器

堅穴建物 H-49においては、多系統の土器が共存する（第31図）。84は口縁端部の作りが複雑で弱く波打ち、口縁部には指頭圧痕が残る近江系長浜甕 F類であり、5期以降に認められるとされる。85は在地の赤井戸式土器である。口縁部から胴部上半に縄文施文が認められるが、頸部下半は無文帯となる。胴部下半はミガキ調整される。95～97は北陸地方南西部が分布の中心となる装飾器台 E類であり、5～8期頃に認められるとされる。98・109は畿内系の二重口縁壺 N類である。108は在地の樽式系である。[若狭・深澤 2005] と対比すれば、5～7（古）期（6期頃）に位置付けられる。覆土下半には As-C が多く含まれており、6期前後に位置付けることが妥当と考えられる。

堅穴建物 H-50においても、多系統の土器が共存する（第32図）。縄文施文土器は赤井戸式（119・120）のほかに東関東系土器（124）も認められ、ここに樽式系（121・125・126）、S字状口縁台付甕と考えら



第31図 下縄引Ⅱ遺跡H-49住居出土土器



第32図 下縄引Ⅱ遺跡H-50住居出土土器

れる胴部片が伴うという [前原 1991]。脚部が大きく開く高杯 (113・117)、小壺 (115)、器台 (114) の形態を [若狭・深澤 2005] と対比すれば、5~7 (古) 期 (6 期頃) に位置付けられる。覆土が、As-C で覆われていることからも、6 期前後に位置付けることが妥当と考えられる。

5. 正尺 C 遺跡における縄文施文土器の編年的位置付け

(1) 新潟シンポ編年 5 期以降の縄文施文土器

正尺 C 遺跡出土の縄文施文土器については、出土状況の検討から新潟シンポ編年 6 期を主体とする古墳時代前期初頭の土器に伴うと考えた。むしろ、共存する土器と異なる年代観を与えることは、不合理と考えられる。このような事例を、従前の編年観から排除することは容易である。しかし、新潟県域及び会津地方、系譜は異なるものの北関東地方における共伴事例を如何に説明すべきであろうか。もはや異時期の混入という説明だけでは解決できない。

そこで、再び隣接地域の共伴事例を確認したい。新潟県域においては、狐森 B 遺跡・狐崎遺跡の遺構出土資料を見る限り 5・6 期頃まで縄文施文土器が残存する可能性が極めて高い。縄文施文土器を「天王

山系」としたものの、変化に乏しい器形や文様帶が退化・形骸化する様子からは、その終末期を示すと考えられた。会津地方の稻荷塚遺跡・中西遺跡においては、少なくとも5・6期、場合によっては7期まで縄文施文土器が残存すると見られた。このうち一部は、共伴関係を慎重に評価すべきものも含まれるが、共伴関係を覆すことが難しい事例もある。混在の可能性が極めて低い正尺C遺跡の事例は、これらの共伴関係を支持する資料と言える。また、北関東地方においても、外来系土器を指標に新潟シンポ編年と対応させれば、少なくとも6期頃まで縄文施文土器が伴うことが明らかである。このことは、6期頃に噴出した浅間C軽石(As-C)を指標に裏付けることができる。

一方、山形県に目を転ずると捉え方が異なる。植松暁彦は山形県内における弥生時代後期～古墳時代前期の変遷観を述べる中で、4期併行段階に天王山式に後続する土器群が存在することを指摘した。そして、その特徴を「細い沈線で連弧文や羽状の撫糸文等施文。」[植松 2005]とした。特に、細い沈線による連弧文の存在は、正尺C遺跡の特徴と共通するが、植松は編年的に古い段階に位置付けている。同様の形態が長く継続すると理解するのか、編年の齟齬と理解するのか、筆者は判断することができない。しかし、新潟シンポ編年を基軸に考えることで、地域間の編年上の対比を行うことができる。今後、地域を超えて等質的に検討されることを期待したい。

なお、縄文施文土器が出土した遺跡に墓域が伴うことが特徴的である。狐森B遺跡・中西遺跡では墓坑?、稻荷塚遺跡では周溝墓から縄文施文土器が出土している。正尺C遺跡においては、性格は明らかでないものの方形周溝墓状の遺構が検出されている。墓域を伴う当該期の集落が少ない現状において、縄文施文土器の出土率の高さは特筆すべきであろう。このことが意味することは明らかでないが、今後、類例の増加に注視する必要がある。

(2) 文様帶の比較

文様帶構造を他遺跡と比べると、いくつかの共通点を見出すことができる(第33図)。鈴木正博による文様帶[鈴木 1976](第10図)にしたがって記述すると、I文様帶では口縁端部に刻みが施されることがあるものの、基本的には縄文が施文されるのみである。IIa文様帶は無文である。II文様帶が消滅し、III文様帶上部の一部には連弧文が施される事例がある。しかし、弥生期のそれと比べると細く、貧弱である。また、胴部最上段に施された附加条は、装飾的な効果も考慮されている可能性が高く、III文様帶上部に対比して理解できる可能性がある。III文様帶下部では、縄文が施文される。縄文の原体は弥生期からの伝統を引き継ぎRLに偏重するが、LRも認められる。

このような文様帶構造を会津地方の天王山系(稻荷塚遺跡SZ02出土資料)、北関東地方の赤井戸式(下縄引II遺跡XII H-11号住居出土資料)と比較してみたい(第33図)。I文様帶は縄文施文(口縁端部に刺突文を施すことあり)、IIa文様帶は無文であるところまでは共通する。III文様帶上部は、正尺C遺跡では連弧文や附加条による施文、稻荷塚遺跡では条が縦走する縄文、下縄引II遺跡では縄文である。III文様帶下部は、正尺C遺跡では縄文、稻荷塚遺跡では条が横走する縄文、下縄引遺跡ではミガキ調整である。稻荷塚遺跡例のように、条の方向を変えながら文様帶を形成する事例は、天王山系土器にしばしば認められる。このように手法は異なるものの、胴部上半と下半とで、施文・調整が異なることが明らかである。このような相違を文様帶と呼ぶかという問題はあるとしても、東北日本で伝統的に保持してきた文様帶の基本構造を反映するものと考えられ、その終焉を示す事象と評価したい。

(3) 折衷土器の存在

天王山系土器が終焉を迎えるにあたっては、折衷土器が出現する。越後では渡邊朋和によって「八幡山式」が設定された〔渡邊 2001〕が、会津地方でも良好な資料を認めることができる。第 34 図に稻荷塚遺跡 SI06 から出土した器形が良く似た土器を提示した。いずれも有段口縁で細い頸部を有することを特徴とする器形であるが、施文方法が異なり、比較検討する上で貴重な資料と言える。

A は、沈線や刺突により文様が施されるものである。I 文様帯には沈線による文様、口頸部界に刺突文が施される。刺突文は、交互刺突文が退化・形骸化したものと評価でき、弥生期のものとしても後期後半段階に位置付けられよう。II a 文様帯は無文、頸胴部界に 1 条の沈線を引いて、その下位に III 文様帯上部が形成される。内外面にはハケメ調整が認められ、土師器との折衷的な様相をうかがい知ることができる。広義の「天王山系」の範疇に含めることができる土器である。

B・C は、外面：縄文施文、内面：ハケメ調整の土器である。B は I 文様帯に縄文、II a 文様帯は無文、III 文様帯は縄文である。C は B と良く似るが、I 文様帯が縄文施文でなくハケメ調整される点が異なる。

D は、全面ハケメ調整の土器である。I 文様帯は横方向、II 文様帯は横方向、III 文様帯は縦方向のハケメ調整認められ、胴部下半ではハケメの方向が斜めになる。

これらを単純に時間軸に置き換えるなら、A → B → C → D という変化の過程をたどることができよう。しかし、これらは共伴関係にある。古相を示す個体と、新相の特徴を取り込んだ個体が共存することは、土器変遷における重要な転換期を反映する事象といえよう。そして、こうした折衷土器を介して、天王山系土器は終焉を迎えていくのであろう。

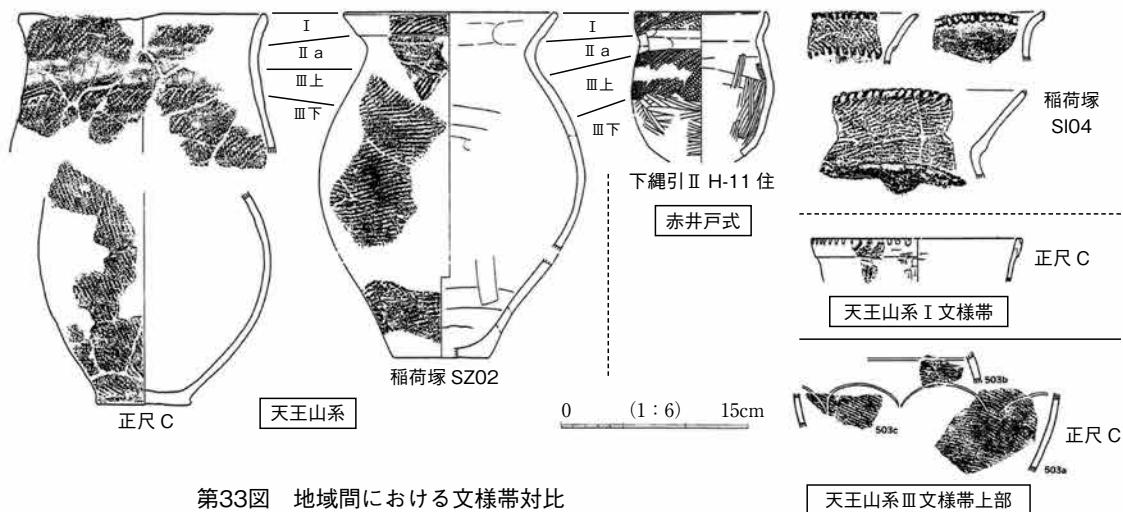
(4) 正尺 C 遺跡出土土器の評価

正尺 C 遺跡出土の縄文施文土器は、発掘調査直後に話題となったが、報告書刊行後にその位置付けについて具体的に言及したのは、管見の限り野田豊文のみである。野田は、「屋敷段階よりも新しい段階の存在については、杵ガ森古墳・稻荷塚遺跡や正尺 C 遺跡の成果の中で、周溝内や同一層位から古式土師器とともに検出されており、広義の天王山式土器の新しいものは古墳時代初頭まで下る可能性が高い。しかし、この点については慎重を要する。」〔野田 2010〕とした。縄文施文土器が、古墳時代初頭まで残存することを明言した点において注目される。そして、縄文施文土器群の特徴を次のように記載した。

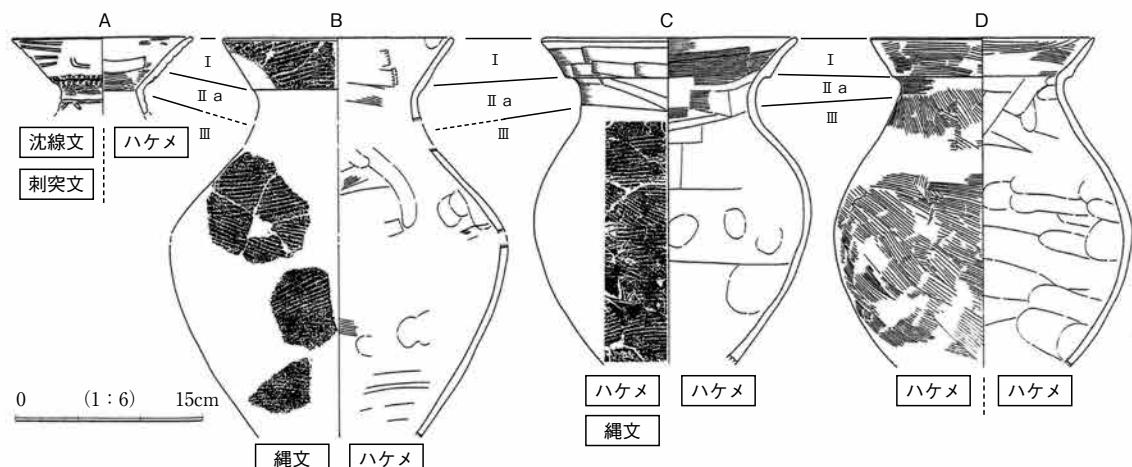
「器種は壺・甕のみで、器形は天王山式と同様である。口縁部に刺突列や押圧列をもつものがあるが、基本的に素文で、LR 縄文、撚糸文、付加条、羽状撚糸文などが施される。多段にわたる文様帯や胴部上半文様帯に磨消縄文をもたない土器群を『杵ガ森段階』とする。現在のところ、このような条件を満たすものが屋敷段階に後続する土器群に相当すると考える。」

そして、正尺 C 遺跡の縄文施文土器について「型式学的特徴は、滝ノ前段階というよりは、八幡山 B 群 2 期新以降に相当する。この土器群が古墳時代前期、現在の状況では、6 期までは存在するのは、確かのことである。杵ガ森古墳例からも 7 期ぐらいまでは、縄文の施文された土器が含まれる可能性が強い。ここでは、福島県域の最新段階を杵ガ森段階としたが、正尺 C 遺跡出土土器は、県内の天王山式土器の終末を示す資料であるといえる。」とした〔野田 2010〕。

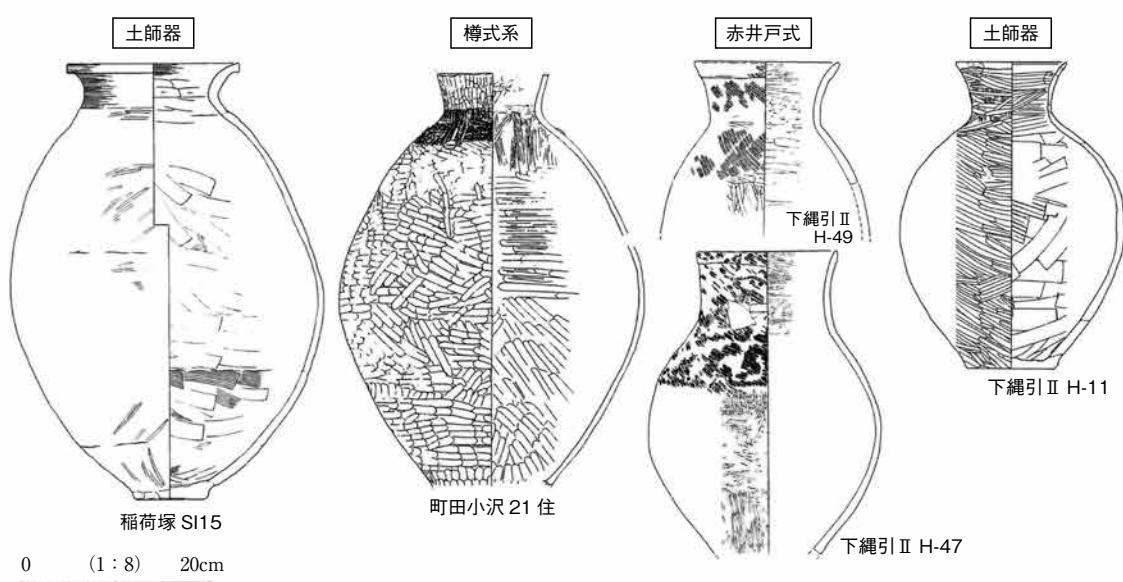
野田の指摘は、従前の杵組みを再編する上で極めて大胆な論説である。まだ、公表されて間もないため、反応は聞き及んでいないが、今後の研究に向けて大きな転換点となる論文と評価したい。弥生時代からの系譜を踏む天王山系土器が、地域的に古墳時代前期前半まで残存したとする考えは、ごく自然な理解と考



第33図 地域間における文様帶対比



第34図 稲荷塚遺跡SI06出土の折衷土器



第35図 長胴甕の系譜

えられる。古墳時代の幕開けとともに、天王山系土器が突如として姿を消したのではなく、漸移的に消滅していくのは自然の成り行きである。弥生時代後期には、その兆候を読み取ることができ、新潟県域では東北系土器の比率が暫時、減少する様子を理解できる。また、北陸系と東北系の折衷的な土器の存在も、その兆候のひとつといえよう。

このような背景のもと、正尺C遺跡が所在する阿賀北地域では、古墳時代へ移行する過程で、天王山系土器が残存したと理解したい。すなわち、東北系（天王山系）の文化圏にある地域では、古式土師器と天王山系土器が共存する時期があったと考えるべきであろう。天王山系土器は、本稿における共伴・共存事例の検討から、新潟シンポ編年6期頃までは確実に残存する。それ以降の資料については共伴事例がなく明瞭でないが、会津地方では7期頃までは残存する可能性もある。特に、大塚遺跡の状況を勘案すれば、新潟県域でも7期頃まで残存した可能性を想定しておくべきであろう。しかし、正尺C遺跡より北側に所在する6～7期の西川内南遺跡〔野水2005〕等においては、縄文施文土器は出土しておらず、課題を残す。これらの状況を総合すると、6期には天王山系土器が明らかに存在し、7期になると共存関係が不明瞭となり、8期以降にまで残存する明らかな事例はない。したがって、おおむね古墳時代前期前半（6～7期）で天王山系土器が終焉を迎えると考えたい。

一方、西方に目を向けてみたい。久田正弘は、北陸地方南西部（石川県・富山県）における天王山式土器の集成を行い、猫橋式後半（1期）～法仏I式（2期）と天王山式後半が共伴する可能性が高いとした〔久田2009〕。すなわちこの記述は、弥生時代終末期以降には天王山式土器が存在しないことを意味する。そして、北陸地方南西部においては、天王山系土器が新潟県北部地域より早く姿を消すことが分かる。このような変化は、弥生土器から古式土師器へのスムーズな移行を示すのであろう。

正尺C遺跡は、阿賀野川水系の旧新井郷川の岸辺に立地する。阿賀野川は、時代を超えて新潟平野と会津盆地をつなぐ大動脈である〔若崎・小林2006〕。したがって、考古資料において新潟平野と会津盆地で共通した特徴を見出せることは、ごく自然な事象といえる。正尺C遺跡と会津地方の遺跡とは、直線距離で70kmほど離れているが、阿賀野川の水運を利用すれば決して遠く離れた地とはいえない（第1図）。むしろ、北陸系の土器が会津地方で出土していることを勘案すれば、地域間の関係を積極的に捉えるべきである。先述のとおり、古墳時代前期の土器に伴う縄文施文土器は、弥生時代後期からの系譜にある天王山系土器の終末期を示すと考えられる。特に、天王山系の文化圏にある阿賀北地域においては、同様の遺跡が検出される可能性が高く、類例の増加に注視する必要がある。

最後に、新潟シンポ編年という時間軸が設定されていたからこそ、本稿の検討が可能であったことを強調しておきたい。定点観測の積み重ねという前提があつてこそ、本稿は成し得たといえる。どの時代を検討する場合も共通する問題であるが、地域ごとでそれぞれの編年が設定されており、対応関係の整理にひと苦労する。そのような意味においては、2度にわたる新潟シンポジウムで地域間の対応関係が整理されたことによる効果は絶大といえる。編年・分類については、やや抽象的な形態表現も目につくが、近年、滝沢規朗により具体的な解説が加えられ〔滝沢2005b・2006・2007・2010a・b等〕、新潟シンポ編年の有効性が改めて認識されつつある。今後は、各期の良好な一括資料がすべて揃った段階で、改めて検証することが望まれよう。

おわりに

中村五郎は、杵ガ森古墳・稻荷塚遺跡出土の縄文施文土器について、次のように結論付けている。

「遺構ごとの土器を詳細に観察すると、各遺構により一定の特色を持っている。文様や縄文の特色からそれら遺構別に前後関係の試論も可能である。しかし、ここでの議論の前提として、土師器の型式区分のために発掘時に特段の所見がなければ、作業仮説として遺構ごとに一括資料と一般に理解している。このような限界が存在することを勘案すれば、ここでいたずらに細分するよりも、追加資料の発見の際に検討することが正しいと考える。ここでは SI01・04・06 の各住居跡発見の文様や縄文を持つ土器を、ひとまず会津盆地で最古の土師器の段階としての理解にとどめることが妥当であろう。」[中村 1995b]

中村の記述は、資料操作の適切な過程を示したうえで、然るべき結論を見出したと言える。そして、中村の言う「追加資料の発見」の一つが正尺 C 遺跡出土の土器なのである。正尺 C 遺跡における縄文施文土器を、弥生土器の混在としまえば、研究の新たな一步を踏み出すことができない。しかし、ここで問題の重要性を改めて指摘することで、再び、研究の俎上に上げることができる。

筆者は、糸魚川市内の発掘調査で、同様の状況に直面したことがある。古墳時代前期の遺跡を発掘調査した際、多数出土した剥片石器の位置付けについて判断に苦しんだ。共伴遺物からは古墳時代前期の石器（打製石斧・横刃形石器）と評価せざるを得なく、そのように報告した [加藤 2008]。これに対しては異論もあるようだが、紙上での反論は今のところ見られない。実は、北陸地方の古墳時代前期の遺跡においては、打製石斧（石鉤）が多数出土する事例がある。報告書をどう読んでも古墳時代前期の遺構からまとまって出土しているのであるが、その重要性が適切に記載されていない事例が散見された。

発掘調査で異質な遺物が出土したとき、無理な型式学的操作を行う前に、まずは出土状況を吟味すべきである。しかし、このことを検討できるのは発掘調査時のみである。発掘調査担当者は、遺物の出土状況を精緻に観察し、報告書にはその情報を過不足なく記載しなくてはならない。その記載によって導き出された結論が、後に誤りであることが明らかとなったとしても、それは調査・研究の進展によるものである。何も恥じることではない。遺構・遺物に真正面から向き合い、調査所見を真摯に評価することこそが、発掘調査担当者の責務なのである。至極当然のことではあるが、正尺 C 遺跡の「縄文施文土器」の評価をめぐって、改めて痛感することとなった。

謝辞

門外漢の筆者が本稿を執筆するにあたっては、滝沢規朗氏・野田豊文氏から後押ししていただきました。そして、完成まで程遠い原稿に目を通していただき、適切な助言をいただきました。記して深くお礼申し上げます。また、本稿は 2010 年 12 月 11 日に開催した「新潟県考古学会 2010 年度第 2 回研究発表会」の発表内容をもとにしています。当日、会場にて拙い発表に長時間お付き合いいただき、貴重なご教示いただいた 20 名の皆様に深くお礼申し上げます。

引用・参考文献

- 青山博樹 2004 「底部穿孔壺の思想」『日本考古学』第 18 号 日本考古学協会
青山博樹 2005 「会津における弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会
赤塚次郎 1990 「V 考察 1 回間式土器」『回間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター

- 猪狩忠雄 2000 「福島県における弥生後期の土器編年」『東日本弥生時代後期の土器編年〔第2分冊〕』東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会・福島県立博物館
- 石川日出志 2000 「天王山式土器弥生中期説への反論」『新潟考古』第11号 新潟県考古学会
- 石川日出志 2004 「弥生後期天王山式土器成立における地域間関係」『駿台史学』第120号 駿台史学会
- 伊藤秀和 2000 『丸潟遺跡・新通遺跡』新潟県加茂市教育委員会・山武考古学研究所
- 入澤雪絵・加部二生 2000 「群馬県域における弥生時代後期の概要」『東日本弥生時代後期の土器編年〔第1分冊〕』東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会・福島県立博物館
- 岩崎卓也 1963 「古式土師器考」『考古学雑誌』48卷3号 日本考古学會
- 植松暁彦 2005 「山形県の弥生後期～古墳時代前期の様相」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会
- 宇佐美篤美・坂井秀弥 1987 「西谷遺跡」『柏崎市史資料集 考古篇1』新潟県柏崎市史編さん室
- 尾崎高宏 2001 『正尺A遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第107集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 柿沼幹夫 1982 「吉ヶ谷式土器について」『土曜考古』第5号 土曜考古学研究会
- 春日真実 2008 『六反田南遺跡・前波南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第202集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2001 「豊栄市正尺C遺跡の調査」『新潟県考古学会第13回大会 研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
- 加藤 学 2008 『姫御前遺跡I』新潟県埋蔵文化財調査報告書第184集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金子拓男 1981 「狐崎遺跡」『三条市史 資料編1 考古・文化』新潟県三条市
- 金子拓男 1983 『緒立遺跡発掘調査報告書』新潟県黒崎町教育委員会
- 金子拓男・坂井秀弥 1983 『高塙B遺跡発掘調査報告書』西山町文化財調査報告書第1集 新潟県西山町教育委員会
- 加部二生・前原 豊 1993 「内堀遺跡群（下縄引遺跡）」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 加部二生 1998 「群馬県大屋H遺跡の調査」『古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題』東日本埋蔵文化財研究会群馬県実行委員会・群馬県考古学研究所
- 加部二生 2000 「内堀遺跡群（下縄手遺跡）」「大屋H遺跡」『東日本弥生時代後期の土器編年〔第1分冊〕』東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会・福島県立博物館
- 川村浩司 1993a 「北陸北東部における古墳出現前後の土器組成」『環日本海地域比較研究』第2号 新潟大学環日本海地域比較史研究会
- 川村浩司 1993b 「北陸北東部の古墳時代出現前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 川村浩司 2000 「上越市の古墳時代の土器様相－関川右岸下流域を中心に－」『上越市史研究』第5号 新潟県上越市
- 木本元治 2009 「南東北の弥生時代後期の土器編年－会津地域を中心に－」『福島考古』第50号 福島県考古学会
- 楠 正勝 2003 「装飾器台の成立と展開」『庄内土器研究』26 庄内土器研究会
- 熊野正也 1996 「吉ヶ谷式土器」『日本土器事典』雄山閣
- 小島純一 1983 「赤井戸式土器について－赤城山麓の後期弥生土器の一様相－」『人間・遺跡・遺物』文献出版
- 小島純一 1996 「赤井戸式土器」『日本土器事典』雄山閣
- 駒形敏朗ほか 1987 『横山遺跡』新潟県長岡市教育委員会
- 坂井秀弥・川村浩司 1993 「古墳出現前後における越後の土器様相－越後・会津・能登－」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』平成2年度文部科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書（研究代表者 甘粕健）
- 坂井秀弥・金子正典・川村浩司 1993 「三条市狐崎遺跡出土の古式土師器について」『新潟県考古学会連絡紙』第15号 新潟県考古学会
- 鈴木正博 1976 「十王台式理解のために（2）－前号の追加1とリュウガイ第IV群a類土器について－」『常総台地』8 常総台地研究会
- 千田一志 2009 「福島県会津盆地における弥生時代後期から古墳時代前期までの様相」『福島考古』第50号 福島県考古学会
- 園田守央・加部二生 1989 「内堀遺跡群II」群馬県前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 滝沢規朗 2005a 「土器の分類と変遷－いわゆる北陸系を中心に－」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2005b 「越後・佐渡における弥生時代後期～古墳時代前期の『く』の字甕について」『三面川流域の考古学』第4号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2006 「口縁端部上端がつまみ上げられた有段高杯について－古墳出現期に認められる一タイプの雑感－」『新潟考古学談話会会報』第31号 新潟考古学談話会
- 滝沢規朗 2007 「新潟県におけるタタキ甕・布留式系甕について」『研究紀要』第5号 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 滝沢規朗 2009 『山元遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第199集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗 2010a 「新潟県弥生時代後期における北陸北東部系の高杯・器台について」『三面川流域の考古学』第8号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2010b 「古墳出現前後に盛行する中山南型式の高杯について－北陸北東部固有の大型・有稜・身の浅い高杯についての一試論－」『新潟考古』第21号 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2010c 「山元遺跡と北陸の弥生後期」『第5回 年代測定と日本文化研究 シンポジウム予稿集』シンポジウム事務局・株式会社加速器分析研究所
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡I』石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2007 「法仏式と月影式」『石川県埋蔵文化財情報』第18号 財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 田中耕作・坂野井絵里 2007 『狐森B遺跡』新発田市埋蔵文化財調査報告第34 新潟県新発田市教育委員会
- 辻 秀人 2003 「東北南部の古墳出現期の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 鶴巻康志・磯部保衛 1990 「岩船郡神林村衣田遺跡の弥生土器と土師器」『北越考古学』第3号 北越考古学研究会
- 土橋由理子 2006 『馬見坂遺跡・正尺A遺跡・正尺C遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第165集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 外山和夫 1996 「樽式土器」『日本土器事典』雄山閣
- 中村五郎 1976 「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』東出版寧楽社
- 中村五郎 1995a 「弥生土器・続縄文土器・古式土師器」『福島考古』第36号 福島県考古学会
- 中村五郎 1995b 「文様や縄文を施す土器」『杵ガ森古墳・稻荷塚遺跡発掘調査報告書』福島県会津坂下町教育委員会
- 中村五郎 1995c 「利根川上流域での古墳時代移行期前後の土器編年をめぐって」『杵ガ森古墳・稻荷塚遺跡発掘調査報告書』福島県会津坂下町教育委員会
- 野田豊文・野水晃子 2005 「阿賀北地域の様相」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会
- 野田豊文 2010 「新潟県の弥生時代後期後半期の東北系土器群考－村上市滝ノ前遺跡出土土器群の検討から－」『新潟考古』第21号 新潟県考古学会
- 野水晃子 2005 『西川内北遺跡・西川内南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第146集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 久田正弘 2009 「弥生時代の東日本系土器集成－栗林式・天王山式土器を中心に－」『石川考古学会々誌』第52号 石川考古学研究会
- 深澤敦仁 1999 「『赤井戸式』土器の行方」『群馬考古学手帳』9 群馬土器観会
- 深澤敦仁 2000 「群馬県出土の『赤井戸式』土器について」『東日本弥生時代後期の土器編年〔第1分冊〕』東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会・福島県立博物館
- 前原 豊 1991 『内堀遺跡群IV』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 前山精明 2002 『南赤坂遺跡』新潟県巻町教育委員会
- 水澤幸一 2006 『大塚遺跡第4次』胎内市埋蔵文化財調査報告書第2集 新潟県胎内市教育委員会
- 吉田博行 1995 「杵ガ森古墳・稻荷塚遺跡発掘調査報告書」福島県会津坂下町教育委員会
- 吉田博之 1991 「樋渡台畠遺跡」『若宮地区遺跡発掘調査報告書』福島県会津坂下町教育委員会
- 吉村光彦 2002 『大塚遺跡第2次』中条町埋蔵文化財調査報告第23集 新潟県中条町教育委員会
- 若狭徹・深澤敦仁 2005 「北関東西部における古墳出現期の社会」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会
- 若崎敦朗・小林隆幸 2006 『新潟の舟運～川がつなぐ越後平野の町・村～』新潟市歴史博物館
- 和田 聰 1990 『宮東遺跡・中西遺跡・男塙遺跡・御穂神塚』福島県会津坂下町教育委員会
- 渡邊朋和 2001 『八幡山遺跡発掘調査報告書』新潟県新津市教育委員会